

Integrated Lights Out Manager 2.0 補足マニュアル

SPARC Enterprise T5140/T5240 サーバ





Integrated Lights Out Manager 2.0 補足マニュアル SPARC Enterprise™ T5140/T5240 サーバ

本書には、富士通株式会社により提供および修正された技術情報が含まれています。

Sun Microsystems, Inc. および富士通株式会社は、それぞれ本書に記述されている製品および技術に関する知的所有権を所有または管理しています。これらの製品、技術、および本書は、著作権法、特許権などの知的所有権に関する法律および国際条約により保護されています。これらの製品、技術、および本書に対して Sun Microsystems, Inc. および富士通株式会社が有する知的所有権には、<http://www.sun.com/patents> に掲載されているひとつまたは複数の米国特許、および米国ならびにその他の国におけるひとつまたは複数の特許または出願中の特許が含まれています。

本書およびそれに付随する製品および技術は、その使用、複製、頒布および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。富士通株式会社と Sun Microsystems, Inc. およびそのライセンサーの書面による事前の許可なく、このような製品または技術および本書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。本書の提供は、明示的であるか黙示的であるかを問わず、本製品またはそれに付随する技術に関するいかなる権利またはライセンスを付与するものでもありません。本書は、富士通株式会社または Sun Microsystems, Inc. の一部、あるいはそのいずれかの関連会社のいかなる種類の義務を含むものでも示すものでもありません。

本書および本書に記述されている製品および技術には、ソフトウェアおよびフロント技術を含む第三者の知的財産が含まれている場合があります。これらの知的財産は、著作権法により保護されているか、または提供者から富士通株式会社および / または Sun Microsystems, Inc. へライセンスが付与されているか、あるいはその両方です。

GPL または LGPL が適用されたソースコードの複製は、GPL または LGPL の規約に従い、該当する場合に、一般ユーザーからのお申し込みに応じて入手可能です。富士通株式会社または Sun Microsystems, Inc. にお問い合わせください。

この配布には、第三者が開発した構成要素が含まれている可能性があります。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company Limited が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。

Sun™、Sun Microsystems™、Sun のロゴ®、Java™、Netra™、Solaris™、Sun StorageTek™、docs.sun.comSM、OpenBoot™、SunVTS™、SunSolveSM、CoolThreads™、J2EE™ および Sun Fire™ は、米国およびその他の国における Sun Microsystems, Inc. またはその子会社の商標または登録商標です。

富士通および富士通のロゴマークは、富士通株式会社の登録商標です。

すべての SPARC 商標は、SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、Sun Microsystems, Inc. が開発したアーキテクチャーに基づくものです。

SPARC64 は、Fujitsu Microelectronics, Inc. および富士通株式会社が SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の商標です。

SSH は、米国およびその他の特定の管轄区域における SSH Communications Security の登録商標です。

OPEN LOOK および Sun™ Graphical User Interface は、Sun Microsystems, Inc. が自社のユーザーおよびライセンス実施権者向けに開発しました。Sun Microsystems, Inc. は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカル・ユーザーインタフェースの概念の研究開発における Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。Sun Microsystems, Inc. は Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは、OPEN LOOK GUI を実装しているかまたは Sun の書面によるライセンス契約を満たす Sun Microsystems, Inc. のライセンス実施権者にも適用されます。

United States Government Rights - Commercial use. U.S. Government users are subject to the standard government user license agreements of Sun Microsystems, Inc. and Fujitsu Limited and the applicable provisions of the FAR and its supplements.

免責条項：本書または本書に記述されている製品や技術に関して富士通株式会社、Sun Microsystems, Inc. またはそのいずれかの関連会社が行う保証は、製品または技術の提供に適用されるライセンス契約で明示的に規定されている保証に限りです。このような契約で明示的に規定された保証を除き、富士通株式会社、Sun Microsystems, Inc. およびそのいずれかの関連会社は、製品、技術、または本書に関して、明示、黙示を問わず、いかなる種類の保証も行いません。これらの製品、技術、または本書は、現状のまま提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も、かかる免責が法的に無効とされた場合を除き、行われぬものとします。このような契約で明示的に規定されていないかぎり、富士通株式会社、Sun Microsystems, Inc. またはそのいずれかの関連会社は、いかなる法理論のものも第三者に対しても、その収益の損失、有用性またはデータに関する損失、あるいは業務の中断について、あるいは間接的損害、特別損害、付随的損害、または結果的損害について、そのような損害の可能性が示唆されていた場合であっても、適用される法律が許容する範囲内で、いかなる責任も負いません。

本書は、「現状のまま」提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も、かかる免責が法的に無効とされた場合を除き、行われぬものとします。

原典： Integrated Lights Out Manager 2.0 Supplement for SPARC Enterprise T5140 and T5240 Servers
Manual Code: C120-E499-03EN



Adobe PostScript

目次

はじめに ix

1. SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバ用 ILOM 1

ILOM の概要 1

プラットフォーム固有の ILOM 機能 1

サポートされていない ILOM 機能 2

2. ホストの管理 3

ホストのリセット 4

ホストの起動モードの管理 4

起動モード 5

- ▼ CLI を使用してホストの起動モードの LDom s 構成を管理する 6
- ▼ CLI を使用してホストのリセット時の起動モードの動作を変更する 6
- ▼ CLI を使用してホストの起動モードのスクリプトを管理する 7
- ▼ CLI を使用してホストの起動モードの有効期限を表示する 8
- ▼ ウェブインターフェースを使用して起動モードの構成設定を管理する 8

ホスト情報の表示およびエラー状況に関するシステムポリシーの設定 9

- ▼ CLI を使用してホストの MAC アドレスを表示する 10
- ▼ CLI を使用してホストの OpenBoot のバージョンを表示する 10
- ▼ CLI を使用してホストの POST のバージョンを表示する 11

- ▼ CLIを使用してウォッチドッグタイマーが期限切れになったときのホストの動作を指定する 11
- ▼ CLIを使用して診断中にエラーが検出された場合のホストの動作を指定する 12
- ▼ ウェブインターフェースを使用してホストの情報を管理する 12

ホスト診断の管理 13

- ▼ CLIを使用して診断モードを変更する 14
- ▼ CLIを使用して診断トリガーの条件を指定する 14
- ▼ CLIを使用して診断のレベルを指定する 15
- ▼ CLIを使用して診断出力の冗長性の量を選択する 15
- ▼ ウェブインターフェースを使用して診断設定を管理する 16

システムユーザの対話の管理 17

- ▼ CLIを使用してブレイク信号の送信または強制的なコアダンプの実行を有効にする 18
- ▼ CLIを使用してホストの状態情報を表示する 18

3. サービスプロセッサの管理 19

顧客情報の格納 20

- ▼ CLIを使用して顧客のFRUデータを変更する 20
- ▼ CLIを使用してシステム識別情報を変更する 21
- ▼ ウェブインターフェースを使用して顧客の識別情報を変更する 21

出荷時のデフォルトへのサービスプロセッサ設定の変更 22

- ▼ CLIを使用してサービスプロセッサの設定を出荷時のデフォルトにリセットする 22
- ▼ ウェブインターフェースを使用してサービスプロセッサの設定を出荷時のデフォルトにリセットする 23
- ▼ CLIを使用してコンソール履歴を表示する 23
- ▼ CLIを使用してコンソールのエスケープ文字を変更する 24

構成ポリシーの設定の変更 25

- ▼ CLIを使用してユーザーデータベースのバックアップを指定する 25
- ▼ CLIを使用してホストの電源投入ポリシーを指定する 26

- ▼ CLI を使用して電源投入の遅延を使用不可または再度使用可能にする 27
 - ▼ ウェブインターフェースを使用して構成ポリシーの設定を管理する 28
- 電源管理メトリックスの表示 28
- 電源管理の用語 29
 - ▼ CLI を使用して電源管理プロパティを表示する 30
 - ▼ システムの総消費電力を表示する 31
 - ▼ ウェブインターフェースを使用して電源管理プロパティを表示する 32
- ネットワークアクセスの管理 32
- ▼ CLI を使用して SP へのネットワークアクセスを使用不可または再度使用可能にする 33
 - ▼ DHCP サーバの IP アドレスを表示する 33
- SSH サーバの設定の管理 34
- ▼ CLI を使用して SSH 鍵のタイプを変更する 34
 - ▼ CLI を使用して新しい SSH 鍵セットを生成する 35
 - ▼ CLI を使用して SSH サーバを再起動する 35
 - ▼ CLI を使用して SSH サービスを使用可能または使用不可にする 35
 - ▼ ウェブインターフェースを使用して SSH サーバの設定を管理する 36
- 4. 仮想キースイッチの設定の管理 39**
- ▼ CLI を使用して仮想キースイッチを制御する 39
 - ▼ ウェブインターフェースを使用して仮想キースイッチを制御する 40
 - ▼ CLI を使用してコンポーネントの状態を表示する 41
- 5. IPMI センサーのリファレンス 43**
- SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバのセンサー 44
 - SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバのインジケータ 48
- 6. ALOM CMT 互換シェル 51**

ILOM ネットワーク構成プロパティの確定 51

▼ ALOM CMT 互換シェルを作成する 52

ILOM コマンドと ALOM CMT コマンドの比較 54

はじめに

このマニュアルでは、Integrated Lights Out Manager (ILOM) のサービスプロセッサ (SP) に関する情報について説明します。SP を使用すると、サーバを遠隔で管理できます。このマニュアルは、UNIX® コマンドについての知識と経験が豊富なシステム管理者を対象としています。

安全な使用のために

このマニュアルには当製品を安全に使用していただくための重要な情報が記載されています。当製品を使用する前に、このマニュアルを熟読してください。また、このマニュアルは大切に保管してください。

富士通は、使用者および周囲の方の身体や財産に被害を及ぼすことなく安全に使っていただくために細心の注意を払っています。本製品を使用する際は、マニュアルの説明に従ってください。

マニュアルの構成

このマニュアルは、次の章で構成されています。

- **SPARC Enterprise T5140およびT5240サーバ用 ILOM**
ILOM 2.0 の概要について説明します。
- **ホストの管理**
ホストの SPARC 固有の機能の管理について説明します。
- **サービスプロセッサの管理**
SP の SPARC 固有の機能の管理について説明します。
- **仮想キースイッチの設定の管理**
システムデバイスの SPARC 固有の機能の管理について説明します。
- **IPMI センサーのリファレンス**
IPMI センサーデータ (/sys 名前空間) を示します。
- **ALOM CMT 互換シェル**
ILOM のコマンドとプロパティに対応する ALOM CMT 互換シェルのコマンドとプロパティのリストを示し、説明します。
- **索引**
必要に応じて読者がこのマニュアル内の項目を容易に検索できるように、キーワードおよび対応する参照先ページ番号を示します。

関連マニュアル

SPARC Enterprise™ シリーズのすべてのマニュアルは、次のウェブサイトで最新版を提供しています。

国内

(<http://primeserver.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/>)

海外

(<http://www.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/>)

タイトル	説明	コード
SPARC Enterprise T5140サーバ はじめにお読みください	サーバの初回電源投入および起動のために必要な簡易手順	C120-E518
SPARC Enterprise T5140サーバ はじめにお読みください (DC 入力電源作動モデル用)	DC入力電源作動モデルにおける初回電源投入および起動のために必要な簡易手順	C120-E552
SPARC Enterprise T5240サーバ はじめにお読みください	サーバの初回電源投入および起動のために必要な簡易手順	C120-E519
SPARC Enterprise T5240サーバ はじめにお読みください (DC 入力電源作動モデル用)	DC入力電源作動モデルにおける初回電源投入および起動のために必要な簡易手順	C120-E553
SPARC Enterprise T5140/T5240 サーバ プロダクトノート	製品の更新および問題に関する最新情報	C120-E458
Important Safety Information for Hardware Systems	SPARC Enterpriseシリーズのすべてのサーバに共通する安全性に関する情報	C120-E391
SPARC Enterprise T5140/T5240 サーバ 安全に使用していただく ために	このサーバの安全性および適合性に関する情報	C120-E461
SPARC Enterprise/ PRIMEQUEST共通 設置計画マ ニュアル	SPARC Enterprise およびPRIMEQUEST を設置するための、設置計画および設備計画に必要な事項や考え方	C120-H007
SPARC Enterprise T5140/T5240 サーバ 設置計画マニュアル	設置計画に関するサーバの仕様	C120-H027
SPARC Enterprise T5140/T5240 サーバ 製品概要	製品の機能	C120-E460
SPARC Enterprise T5140/T5240 サーバ インストールガイド	ラック搭載、ケーブル配線、電源投入、および構成に関する詳細情報	C120-E462

タイトル	説明	コード
SPARC Enterprise T5140/T5240 サーバ サービスマニュアル	診断を実行してサーバの障害追跡を行う方法、およびサーバの部品を取り外して交換する方法	C120-E463
SPARC Enterprise T5140/T5240 サーバ アドミニストレーション ガイド	サーバ固有の管理作業の実行方法	C120-E464
PCI ボックス インストレーション・ サービスマニュアル	PCI ボックスを SPARC Enterprise T5120/T5140/T5220/T5240/T5440 サーバ に設置する手順	C120-E543
PCI ボックス プロダクトノート	PCIボックスに関する重要な最新情報	C120-E544

ILOMで管理されるすべてのプラットフォームに共通するILOM機能の使用方法については、次のドキュメントを参照してください。

タイトル	説明	コード
Integrated Lights Out Manager 2.0 ユーザーズガイド	ILOM 2.0の特徴および機能に関する情報	C120-E474
Integrated Lights Out Manager 2.0 補足マニュアル SPARC Enterprise T5140/T5240	このサーバで ILOM 2.0ソフトウェアを使用する方法	C120-E499

ホストサーバを使用して作業する方法については、次のドキュメントを参照してください。ILOM関連のいくつかのタスクの実行方法に関する情報が記載されています。

タイトル	説明
SunVTS User's Guide	診断テストの実行
SunVTS Test Reference Manual	
SunVTS Quick Reference Guide	
Sun Management Center Software User's Guide	
Solaris System Administrator Guide	システムおよびネットワークの管理
SPARC: Installing Solaris Software	
Solaris User's Guide	オペレーティングシステムの使用

UNIX コマンドについて

このマニュアルには、システムの停止、システムの起動、およびデバイスの構成などに使用する基本的な UNIX® コマンドと操作手順に関する説明は含まれていない可能性があります。これらについては、以下を参照してください。

- 使用しているシステムに付属のソフトウェアマニュアル
- 下記にある Solaris™ オペレーティングシステムのマニュアル
(<http://docs.sun.com>)

書体と記号について

書体または記号*	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例。	.login ファイルを編集します。 ls -a を実行します。 % You have mail.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して表します。	% su Password:
AaBbCc123	コマンド行の可変部分。実際の名前や値と置き換えてください。	rm <i>filename</i> と入力します。
『』	参照する書名を示します。	『Solaris ユーザーマニュアル』
「」	参照する章、節、または、強調する語を示します。	第 6 章「データの管理」を参照。 この操作ができるのは「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	% grep `^#define \ XV_VERSION_STRING`

* 使用しているブラウザにより、これらの設定と異なって表示される場合があります。

シェルプロンプトについて

シェル	プロンプト
UNIX の C シェル	<i>machine-name%</i>
UNIX の Bourne シェルと Korn シェル	\$
スーパーユーザー (シェルの種類を問わない)	#
ILOM のサービスプロセッサ	->
ALOM 互換シェル	sc >
OpenBoot™ PROM ファームウェア	ok

ご意見をお寄せください

本書に関するご意見、ご要望または内容に不明確な部分がありましたら、マニュアル番号、マニュアル名称、ページおよび具体的な内容を下記URLの『お問い合わせ』から送付してください。

SPARC Enterpriseマニュアルのサイト

(<http://primeserver.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/>)

SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバ用 ILOM

この章では、SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバ用の ILOM について紹介します。また、より包括的な ILOM のドキュメントの参照先も示します。

- 「ILOM の概要」 (P.1)
- 「プラットフォーム固有の ILOM 機能」 (P.1)
- 「サポートされていない ILOM 機能」 (P.2)

ILOM の概要

Integrated Lights Out Manager (ILOM) はシステム管理ファームウェアで、一部の SPARC サーバにプリインストールされています。ILOM を使用すると、サーバにインストールされたコンポーネントをアクティブに管理および監視できます。ILOM には、SNMP や IPMI のインターフェースのほかに、ブラウザベースのインターフェースやコマンド行インターフェースがあります。ILOM の全般的な情報については、『Integrated Lights Out Manager 2.0 ユーザーズガイド』を参照してください。

関連情報

- 「プラットフォーム固有の ILOM 機能」 (P.1)
- 「サポートされていない ILOM 機能」 (P.2)

プラットフォーム固有の ILOM 機能

ILOM は多くのプラットフォーム上で動作し、すべてのプラットフォームに共通する機能をサポートしています。ILOM 機能の中には、すべてのプラットフォームではなく一部のプラットフォームでのみ使用できるものがあります。このマニュアルでは、

SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバ用の ILOM 機能について説明していません。共通の ILOM 機能については、『Integrated Lights Out Manager 2.0 ユーザーズガイド』を参照してください。

関連情報

- 「ILOM の概要」 (P.1)
- 「サポートされていない ILOM 機能」 (P.2)

サポートされていない ILOM 機能

ほかのプラットフォームでサポートされている ILOM 機能の中で、次の機能は SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバの ILOM ではサポートされていません。

- ILOM リモートコンソール
- シングルサインオンなどの、シャーシ監視モジュール (CMM) 機能

関連情報

- 「ILOM の概要」 (P.1)
- 「プラットフォーム固有の ILOM 機能」 (P.1)

ホストの管理

この章では、ほかのプラットフォーム上の ILOM に共通する一連のプロパティに追加された、SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバ用の ILOM 機能について説明します。この章では、特に /HOST 名前空間のプロパティについて説明します。この章は、次の節で構成されています。

説明	作業
ホストの新しいリセット動作を理解します。	「ホストのリセット」 (P.4)
ホストの起動モードを管理します。	「CLI を使用してホストの起動モードの LDoms 構成を管理する」 (P.6) 「CLI を使用してホストの起動モードのスクリプトを管理する」 (P.7) 「CLI を使用してホストのリセット時の起動モードの動作を変更する」 (P.6) 「CLI を使用してホストの起動モードの有効期限を表示する」 (P.8) 「ウェブインターフェースを使用して起動モードの構成設定を管理する」 (P.8)
ホストの情報を表示し、エラー状況に関するシステムポリシーを設定します。	「CLI を使用してホストの MAC アドレスを表示する」 (P.10) 「CLI を使用してホストの OpenBoot のバージョンを表示する」 (P.10) 「CLI を使用してホストの POST のバージョンを表示する」 (P.11) 「CLI を使用してウォッチドッグタイマーが期限切れになったときのホストの動作を指定する」 (P.11) 「CLI を使用して診断中にエラーが検出された場合のホストの動作を指定する」 (P.12) 「ウェブインターフェースを使用してホストの情報を管理する」 (P.12)
ホストの診断を管理します。	「CLI を使用して診断モードを変更する」 (P.14) 「CLI を使用して診断トリガーの条件を指定する」 (P.14) 「CLI を使用して診断のレベルを指定する」 (P.15) 「CLI を使用して診断出力の冗長性の量を選択する」 (P.15) 「ウェブインターフェースを使用して診断設定を管理する」 (P.16)

説明	作業
システムユーザーの対話を管理します。	「CLI を使用してブ레이크信号の送信または強制的なコアダンプの実行を有効にする」 (P.18) 「CLI を使用してホストの状態情報を表示する」 (P.18)

ホストのリセット

reset コマンドでは、ホストサーバのハードウェアリセットが正常にまたは強制的に行われます。デフォルトでは、reset コマンドはホストを正常にリセットします。正常なリセットが実行できない場合は、強制的なリセットが実行されます。ILOM CLI と ALOM 互換 CLI の reset コマンドで使用できるオプションのリストは、[「ILOM コマンドと ALOM CMT コマンドの比較」 \(P.54\)](#) を参照してください。

関連情報

- [「ILOM コマンドと ALOM CMT コマンドの比較」 \(P.54\)](#)

ホストの起動モードの管理

起動モードのプロパティを使用すると、ILOM が起動を処理する方法を指定できます。

- [「起動モード」 \(P.5\)](#)
- [「CLI を使用してホストの起動モードの LDoms 構成を管理する」 \(P.6\)](#)
- [「CLI を使用してホストのリセット時の起動モードの動作を変更する」 \(P.6\)](#)
- [「CLI を使用してホストの起動モードのスクリプトを管理する」 \(P.7\)](#)
- [「CLI を使用してホストの起動モードの有効期限を表示する」 \(P.8\)](#)
- [「ウェブインターフェースを使用して起動モードの構成設定を管理する」 \(P.8\)](#)

起動モード

起動モード (bootmode) プロパティを使用すると、サーバが起動時に使用するデフォルトの方法を上書きできます。この機能は、スクリプトまたは類似のタスクを使用して OpenBoot 変数を設定することで、特定の OpenBoot™ 設定または LDom 設定を上書きする場合に便利です。

たとえば、bootmode state プロパティを reset_nvram に設定して、サーバを出荷時のデフォルトの OpenBoot 設定にリセットすることができます。

保守作業員から、問題の解決に bootmode script プロパティを使用するように指示される場合があります。完全なスクリプトには、主にデバッグ用に用意されている、マニュアルには記載されていない機能があります。

bootmode は、OpenBoot 設定または LDom 設定に関する問題を修正するために使用されることを目的としているため、bootmode はシングルブートでのみ有効です。また、管理者が bootmode state プロパティを設定したまま忘れることを防止するため、bootmode state プロパティが設定されてから 10 分以内にホストがリセットされないと、bootmode state プロパティが期限切れになります。

関連情報

- 「ホストのリセット」 (P.4)
- 「ホストの起動モードの管理」 (P.4)

▼ CLI を使用してホストの起動モードの LDom 構成を管理する

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /HOST/bootmode config=configname
```

config プロパティには、Logical Domains ソフトウェアを使用して SP にダウンロードされた名前付き論理ドメイン構成などの *configname* 値を指定します。

たとえば、ldm-set1: という名前の論理ドメイン構成を作成した場合は、次のように指定します。

```
-> set /HOST/bootmode config=ldm-set1
```

起動モードの config を出荷時のデフォルト構成に戻すには、*factory-default* を指定します。

次に例を示します。

```
-> set /HOST/bootmode config=factory-default
```

関連情報

- 「ホストのリセット」(P.4)
- 「ウェブインターフェースを使用して起動モードの構成設定を管理する」(P.8)

▼ CLI を使用してホストのリセット時の起動モードの動作を変更する

/HOST/bootmode state プロパティは、OpenBoot の非揮発性ランダムアクセスメモリー (NVRAM) 変数の使用方法を制御します。通常、これらの変数の現在の設定が保持されます。/HOST/ bootmode state=reset_nvram を設定すると、次のリセット時に OpenBoot NVRAM 変数がデフォルト設定に変更されます。

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /HOST/bootmode state=value
```

value は、次のいずれかの値です。

- normal – 次のリセット時に、現在の NVRAM 変数の設定を保持します。

- `reset_nvram` - 次のリセット時に、OpenBoot 変数をデフォルト設定に戻します。

注 - 次にサーバをリセットしたあと、または 10 分後 (「CLI を使用してホストの起動モードの有効期限を表示する」 (P.8) の `expires` プロパティを参照) に、`state=reset_nvram` コマンドは `normal` に戻ります。`config` プロパティおよび `script` プロパティが期限切れになることはなく、次にサーバをリセットしたとき、または手動で `value` を `"` に設定したときにクリアされます。

関連情報

- 「ホストのリセット」 (P.4)
- 「ウェブインターフェースを使用して起動モードの構成設定を管理する」 (P.8)

▼ CLI を使用してホストの起動モードのスク립トを管理する

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /HOST/bootmode script=value
```

この場合、`script` は、ホストサーバの OpenBoot PROM ファームウェアの起動方法を制御します。このスク립トは現在の `/HOST/bootmode` 設定には影響を与えません。`value` には、最大 64 バイトの長さの文字列を指定できます。`/HOST/bootmode` 設定を指定して、同じコマンド内でスク립トを設定できます。次に例を示します。

```
-> set /HOST/bootmode state=reset_nvram script="setenv diag-switch? true"
```

サーバをリセットしたあとに OpenBoot PROM がスク립トに格納されている値を読み取ると、OpenBoot PROM 変数 `diag-switch?` はユーザーが要求した値 `true` に設定されます。

注 - `/HOST/bootmode script=""` を設定すると、ILOM は `script` の値を空に設定します。`/HOST/bootmode config=""` を設定すると、ILOM は `config` の値を空に設定します。

関連情報

- 「ホストのリセット」 (P.4)
- 「ウェブインターフェースを使用して起動モードの構成設定を管理する」 (P.8)

▼ CLI を使用してホストの起動モードの有効期限を表示する

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> show /HOST/bootmode expires
    Properties:
        expires = Thu Oct 18 18:24:16 2007
```

この場合、expires は現在の起動モードが期限切れになる日時です。

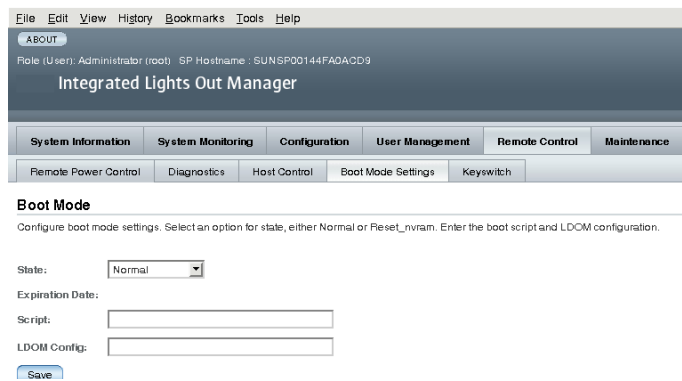
関連情報

- 「[ホストのリセット](#)」 (P.4)
- 「[ウェブインターフェースを使用して起動モードの構成設定を管理する](#)」 (P.8)

▼ ウェブインターフェースを使用して起動モードの構成設定を管理する

ILOM では、サーバのファームウェア環境を構成するいくつかの方法を提供します。起動モードの構成には、次の 4 つの要素があります。

- 状態
 - 有効期限
 - スクリプト
 - LDom 構成
1. ILOM ウェブインターフェースに管理者 (root) としてログインし、ウェブインターフェースを表示します。
 2. 「Remote Control」 -> 「Boot Mode Settings」を選択します。



表示される「Boot Mode」ページ。

3. 必要に応じて、「Boot Mode」の「State」を選択します。
4. 「Expiration Date」が表示されます。
5. 必要に応じて、起動スクリプトを指定します。
6. 必要に応じて、LDoms 構成ファイルを指定します。
7. 「Save」をクリックします。

関連情報

- 「ホストのリセット」(P.4)
- 「ホストの起動モードの管理」(P.4)

ホスト情報の表示およびエラー状況に関するシステムポリシーの設定

システム構成およびファームウェアのバージョン情報を表示するには、ホスト情報プロパティを使用します。

- 「CLI を使用してホストの MAC アドレスを表示する」(P.10)
- 「CLI を使用してホストの OpenBoot のバージョンを表示する」(P.10)
- 「CLI を使用してホストの POST のバージョンを表示する」(P.11)
- 「CLI を使用してウォッチドッグタイマーが期限切れになったときのホストの動作を指定する」(P.11)
- 「CLI を使用して診断中にエラーが検出された場合のホストの動作を指定する」(P.12)

- 「ウェブインターフェースを使用してホストの情報を管理する」 (P.12)

▼ CLI を使用してホストの MAC アドレスを表示する

/HOST macaddress プロパティは、システムソフトウェアによって自動的に構成されるため、設定または変更はできません。値はサーバの取り外し可能なシステム構成カード (SCC PROM) から読み取られて識別され、ILOM にプロパティとして格納されます。

/HOST macaddress は、net0 ポートの MAC アドレスです。各追加ポートの MAC アドレスは、/HOST macaddress から増分されます。たとえば、net1 は /HOST macaddress に 1 を追加した値と同じです。

- このプロパティの現在の設定を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /HOST macaddress
```

関連情報

- 「ホスト情報の表示およびエラー状況に関するシステムポリシーの設定」 (P.9)
- 「ウェブインターフェースを使用してホストの情報を管理する」 (P.12)

▼ CLI を使用してホストの OpenBoot のバージョンを表示する

/HOST obp_version プロパティを使用すると、ホストの OpenBoot のバージョンに関する情報が表示されます。

- このプロパティの現在の設定を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /HOST obp_version
```

関連情報

- 「ホスト情報の表示およびエラー状況に関するシステムポリシーの設定」 (P.9)
- 「ウェブインターフェースを使用してホストの情報を管理する」 (P.12)

▼ CLI を使用してホストの POST のバージョンを表示する

/HOST post_version プロパティを使用すると、ホストの POST のバージョンに関する情報が表示されます。

- このプロパティの現在の設定を表示するには、次のように入力します。

```
-> show /HOST post_version
```

関連情報

- 「[ホスト情報の表示およびエラー状況に関するシステムポリシーの設定](#)」 (P.9)
- 「[ウェブインターフェースを使用してホストの情報を管理する](#)」 (P.12)

▼ CLI を使用してウォッチドッグタイマーが期限切れになったときのホストの動作を指定する

/HOST autorestart プロパティを使用すると、ILOM が Solaris ウォッチドッグタイマーの期限切れをどのように処理するかを指定できます。

- このプロパティを設定するには、次のように入力します。

```
-> set /HOST autorestart=value
```

value には、次の値を設定できます。

- none – ILOM は、警告を発行する以外、何の処理も行いません。
- reset – ILOM は、Solaris ウォッチドッグタイマーが期限切れになると、システムのリセットを試みます (デフォルト)。
- dumpcore – ILOM は、ウォッチドッグタイマーが期限切れになると、OS のコアダンプを強制的に試みます。

関連情報

- 「[ホスト情報の表示およびエラー状況に関するシステムポリシーの設定](#)」 (P.9)
- 「[ウェブインターフェースを使用してホストの情報を管理する](#)」 (P.12)

▼ CLI を使用して診断中にエラーが検出された場合のホストの動作を指定する

/HOST autorunonerror プロパティを使用すると、システム診断によるエラーの検出後、ホストが起動を続行するかどうかを指定できます。

- このプロパティを設定するには、次のように入力します。

```
-> set /HOST autorunonerror=value
```

value は、次のいずれかの値です。

- false – エラーの検出後、システムは起動を中止します (デフォルト)。
- true – エラーの検出後、システムは起動の続行を試みます。

関連情報

- 「[ホスト情報の表示およびエラー状況に関するシステムポリシーの設定](#)」 (P.9)
- 「[ウェブインターフェースを使用してホストの情報を管理する](#)」 (P.12)

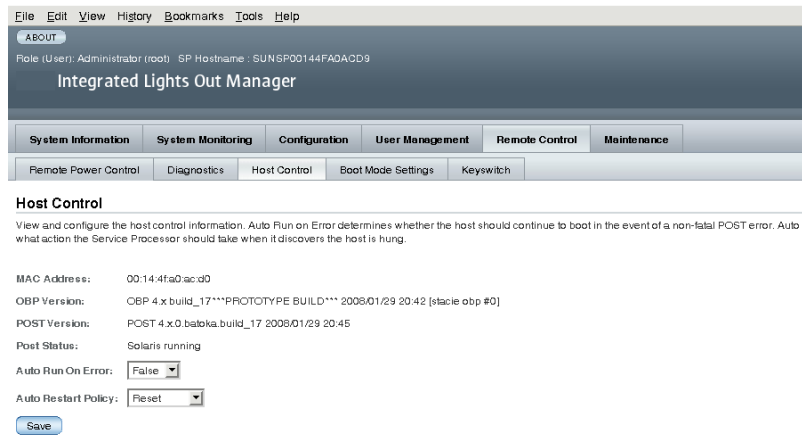
▼ ウェブインターフェースを使用してホストの情報を管理する

この手順では、さまざまな種類のホスト情報を表示および構成する方法について説明します。

ILOM では、ホスト制御機能を表示または構成するいくつかの方法を提供します。ホスト制御には、次の 6 つの要素があります。

- MAC アドレス
- OpenBoot のバージョン
- POST のバージョン
- HOST の状態
- エラー時の自動実行
- 自動再起動ポリシー

1. ILOM ウェブインターフェースに管理者 (root) としてログインし、ウェブインターフェースを表示します。
2. 「Remote Control」 -> 「Host Control」を選択します。



表示される「Host Control」ページ。

3. MAC アドレスが表示されます。
4. OpenBoot のバージョンが表示されます。
5. POST のバージョンが表示されます。
6. 必要に応じて、「Auto Run On Error」の値を選択します。
7. 必要に応じて、「Auto Restart Policy」の値を選択します。
8. 「Save」をクリックします。

関連情報

- 「[ホスト情報の表示およびエラー状況に関するシステムポリシーの設定](#)」 (P.9)

ホスト診断の管理

ILOM がホストサーバの診断をどのように制御するかを指定するには、診断制御プロパティを使用します。

ILOM は、次の診断システムインターフェースプロパティを使用します。

- 「[CLI を使用して診断モードを変更する](#)」 (P.14)
- 「[CLI を使用して診断トリガーの条件を指定する](#)」 (P.14)
- 「[CLI を使用して診断のレベルを指定する](#)」 (P.15)
- 「[CLI を使用して診断出力の冗長性の量を選択する](#)」 (P.15)
- 「[ウェブインターフェースを使用して診断設定を管理する](#)」 (P.16)

▼ CLI を使用して診断モードを変更する

/HOST/diag mode プロパティを使用すると、診断を使用可能にするかどうかを制御し、使用可能にする診断モードを指定できます。

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /HOST/diag mode=value
```

value は、次のいずれかの値です。

- off – どのような診断も実行しません。
- normal – 診断を実行します (デフォルト値)。
- service – 保守技術者による診断を実行します。これは、/HOST/diag trigger=all-resets、/HOST/diag verbosity、および /HOST/diag level=max の事前設定値を使用する場合と同等の機能です。/HOST/diag mode=service を設定すると、set /SYS keyswitch_state=diag コマンドを実行した場合と同じ処理が行われます。

関連情報

- 「[ホスト診断の管理](#)」 (P.13)
- 「[ウェブインターフェースを使用して診断設定を管理する](#)」 (P.16)

▼ CLI を使用して診断トリガーの条件を指定する

/HOST/diag trigger プロパティを使用すると、診断が使用可能な場合に POST が実行される条件を制御できます。

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /HOST/diag trigger=value
```

value には、次のいずれかの値、またはその組み合わせを引用符で囲んで指定します。

- user-reset – システムのリセット時に診断を実行します。
- error-reset – システムをリセットして回復する必要がある致命的エラーが発生した場合に診断を実行します。
- power-on-reset – システムの電源投入時に診断を実行します。
- all-resets – どのようなサーバリセットでも診断を実行します。

- none – 診断をスキップします。
次に例を示します。

```
-> set /HOST/diag trigger="user-reset power-on-reset"  
-> show /HOST/diag trigger  
user-reset power-on-reset
```

デフォルト値は、power-on-reset と error-reset の組み合わせです。

関連情報

- 「[ホスト診断の管理](#)」 (P.13)
- 「[ウェブインターフェースを使用して診断設定を管理する](#)」 (P.16)

▼ CLI を使用して診断のレベルを指定する

/HOST/diag level プロパティを使用すると、診断が使用可能な場合に実行される診断テストのレベルを指定できます。

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /HOST/diag level=value
```

value は、次のいずれかの値です。

- ▼ min – 最小レベルの診断を実行してシステムを検証します。
- ▼ max – 最大設定の診断を実行してシステムの健全性を完全に検証します (デフォルト値)。

関連情報

- 「[ホスト診断の管理](#)」 (P.13)
- 「[ウェブインターフェースを使用して診断設定を管理する](#)」 (P.16)

▼ CLI を使用して診断出力の冗長性の量を選択する

診断が使用可能な場合は、/HOST/diag verbosity プロパティを使用すると、POST 診断からの出力の冗長性レベルを指定できます。

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /HOST/diag verbosity=value
```

value は、次のいずれかの値です。

- none – 障害が検出されないかぎり、診断の実行時にシステムコンソールには出力が表示されません。
- min – 診断で、制限された量の出力がシステムコンソールに表示されます。
- normal – 診断で、適度な量の出力がシステムコンソールに表示されます (デフォルト値)。
- max – 診断で、実行されている各テストの名前と結果を含む完全な出力がシステムコンソールに表示されます。
- debug – 診断で、テストされているデバイスと各テストのデバッグ出力を含む広範囲なデバッグの出力がシステムコンソールに表示されます。

関連情報

- 「[ホスト診断の管理](#)」 (P.13)
- 「[ウェブインターフェースを使用して診断設定を管理する](#)」 (P.16)

▼ ウェブインターフェースを使用して診断設定を管理する

ILOM では、診断を表示または構成するいくつかの方法を提供します。ホスト制御には、次の 4 つの要素があります。

- トリガー
 - 冗長性
 - レベル
 - モード
1. ILOM ウェブインターフェースに管理者 (root) としてログインし、ウェブインターフェースを表示します。
 2. 「Remote Control」-> 「Diagnostics」を選択します。

File Edit View History Bookmarks Tools Help

ABOUT

Role (User): Administrator (root) SP Hostname: SUNSP00144FA0A0D9

Integrated Lights Out Manager

System Information System Monitoring Configuration User Management Remote Control Maintenance

Remote Power Control Diagnostics Host Control Boot Mode Settings Keyswitch

Diagnostics

Select the level of embedded diagnostics to run on the host during start up. The Trigger contains all possible states to cause diagnostics to be run. The Verbosity level information will be given. The Update Mode contains all the possible OPS modes specified to POST.

Trigger:

Verbosity:

Level:

Current Mode:

Update Mode:

表示される「Diagnostics」ページ。

3. 必要に応じて、「Trigger」の値を選択します。
4. 必要に応じて、「Verbosity」の値を選択します。
5. 必要に応じて、「Level」の値を選択します。
6. 「Current Mode」が表示されます。
7. 必要に応じて、「Update Mode」の値を選択します。

関連情報

- 「[ホスト診断の管理](#)」(P.13)

システムユーザーの対話の管理

システムユーザープロパティを使用すると、ILOM によるホストサーバの識別方法およびホストサーバとの対話方法をカスタマイズできます。

- 「[CLI を使用してブレイク信号の送信または強制的なコアダンプの実行を有効にする](#)」(P.18)
- 「[CLI を使用してホストの状態情報を表示する](#)」(P.18)

▼ CLI を使用してブレーク信号の送信または強制的なコアダンプの実行を有効にする

set /HOST send_break_action コマンドを使用すると、OpenBoot PROM プロンプト (ok) に進むことを選択できるメニューがサーバで表示されます。kldb デバッグを設定している場合は、send_break_action=break を指定すると、サーバはデバッグモードになります。強制的なコアダンプを実行するには、send_break_action=dumpcore を指定します。

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /HOST send_break_action=value
```

value は、次のいずれかの値です。

- break – ホストに切断を送信します。
- dumpcore – 管理対象のシステム OS のパニックコアダンプを強制的に行います (すべてのバージョンの OS でサポートされているとはかぎらない)。

関連情報

- 「CLI を使用してホストの状態情報を表示する」 (P.18)

▼ CLI を使用してホストの状態情報を表示する

show /HOST status コマンドを使用すると、ホストサーバの状態に関する情報を表示できます。

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> show /HOST status
```

コマンドによって、次のような情報が返されます。

```
-> show /HOST status
Properties:
    status = Running

Commands:
    show ->
```

関連情報

- 「CLI を使用してブレーク信号の送信または強制的なコアダンプの実行を有効にする」 (P.18)

サービスプロセッサの管理

この章では、ほかのプラットフォーム上の ILOM に共通する一連のプロパティに追加された、SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバ用の ILOM プロパティについて説明します。この章では、特に /SP 名前空間のプロパティについて説明します。

説明	作業
顧客情報を格納します。	「CLI を使用して顧客の FRU データを変更する」 (P.20) 「CLI を使用してシステム識別情報を変更する」 (P.21) 「ウェブインターフェースを使用して顧客の識別情報を変更する」 (P.21)
サービスプロセッサの設定をデフォルトに変更します。	「CLI を使用してサービスプロセッサの設定を出荷時のデフォルトにリセットする」 (P.22) 「ウェブインターフェースを使用してサービスプロセッサの設定を出荷時のデフォルトにリセットする」 (P.23)
コンソールのエスケープ文字を変更します。	「CLI を使用してコンソールのエスケープ文字を変更する」 (P.24)
構成ポリシーの設定を変更します。	「CLI を使用してユーザーデータベースのバックアップを指定する」 (P.25) 「CLI を使用してホストの電源投入ポリシーを指定する」 (P.26) 「CLI を使用して電源投入の遅延を使用不可または再度使用可能にする」 (P.27) 「ウェブインターフェースを使用して構成ポリシーの設定を管理する」 (P.28)
電源管理メトリックスを表示します。	「CLI を使用して電源管理プロパティを表示する」 (P.30) 「システムの総消費電力を表示する」 (P.31) 「ウェブインターフェースを使用して電源管理プロパティを表示する」 (P.32)
ネットワークアクセスを管理します。	「CLI を使用して SP へのネットワークアクセスを使用不可または再度使用可能にする」 (P.33) 「DHCP サーバの IP アドレスを表示する」 (P.33)

説明	作業
SSH サーバの設定を管理します。	<ul style="list-style-type: none"> 「CLI を使用して SSH 鍵のタイプを変更する」 (P.34) 「CLI を使用して新しい SSH 鍵セットを生成する」 (P.35) 「CLI を使用して SSH サーバを再起動する」 (P.35) 「CLI を使用して SSH サービスを使用可能または使用不可にする」 (P.35) 「ウェブインターフェースを使用して SSH サーバの設定を管理する」 (P.36)

顧客情報の格納

この節では、インベントリ制御またはサイトの資源管理などを目的として、SP および FRU PROM に情報を格納できる ILOM 機能について説明します。

- 「CLI を使用して顧客の FRU データを変更する」 (P.20)
- 「CLI を使用してシステム識別情報を変更する」 (P.21)
- 「CLI を使用してシステム識別情報を変更する」 (P.21)

▼ CLI を使用して顧客の FRU データを変更する

/SP customer_frudata プロパティを使用すると、すべての FRU PROM に情報を格納できます。

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /SP customer_frudata="data"
```

注 - データ文字列 ("data") は、引用符で囲む必要があります。

関連情報

- 「CLI を使用してシステム識別情報を変更する」 (P.21)
- 「ウェブインターフェースを使用して顧客の識別情報を変更する」 (P.21)

▼ CLI を使用してシステム識別情報を変更する

/SP system_identifier プロパティを使用すると、顧客の識別情報を格納できます。

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /SP system_identifier="data"
```

関連情報

- 「CLI を使用して顧客の FRU データを変更する」 (P.20)
- 「ウェブインターフェースを使用して顧客の識別情報を変更する」 (P.21)

▼ ウェブインターフェースを使用して顧客の識別情報を変更する

ILOM は、FRU および SP に情報を格納できる機能を備えています。

1. ILOM ウェブインターフェースに管理者 (root) としてログインし、ウェブインターフェースを表示します。
2. 「System Information」 --> 「Identification Information」 を選択します。

The screenshot shows the ILOM web interface. At the top, there is a menu bar with 'File', 'Edit', 'View', 'History', 'Bookmarks', 'Tools', and 'Help'. Below the menu bar is a header section with 'ABOUT' and 'File (User): Administrator (root) SP Hostname: SUNSP00144FA0ACD9'. The main title is 'Integrated Lights Out Manager'. There are several tabs: 'System Information', 'System Monitoring', 'Configuration', 'User Management', 'Remote Control', and 'Maintenance'. Under 'System Information', there are sub-tabs: 'Versions', 'Session Time-Out', 'Components', 'Fault Management', and 'Identification Information'. The 'Identification Information' sub-tab is selected. Below the sub-tabs, the text 'Identification Information' is displayed, followed by 'Configure identification information.' There are three input fields: 'Customer FRU Data:', 'SP Hostname:' (with the value 'SUNSP00144FA0ACD9'), and 'SP System Identifier:'. A 'Save' button is located below the input fields.

表示される 「Identification Information」 ページ。

3. 必要に応じて、「Customer FRU Data」 フィールドを編集します。
4. 必要に応じて、「SP Hostname」を編集します。
5. 必要に応じて、「SP System Identifier」 フィールドを編集します。
6. 「Save」 をクリックします。

関連情報

- 「CLI を使用して顧客の FRU データを変更する」 (P.20)
- 「CLI を使用してシステム識別情報を変更する」 (P.21)

出荷時のデフォルトへのサービスプロセッサ設定の変更

この節では、サービスプロセッサの設定を出荷時のデフォルトに戻す方法について説明します。

- 「CLI を使用してサービスプロセッサの設定を出荷時のデフォルトにリセットする」 (P.22)
- 「ウェブインターフェースを使用してサービスプロセッサの設定を出荷時のデフォルトにリセットする」 (P.23)

▼ CLI を使用してサービスプロセッサの設定を出荷時のデフォルトにリセットする

set /SP reset_to_defaults コマンドを使用すると、すべての ILOM 構成プロパティを出荷時のデフォルト値に戻すことができます。all オプションを指定すると、ILOM 構成とすべてのユーザー情報が出荷時のデフォルト値に戻されます。

1. -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /SP reset_to_defaults=all
```

reset_to_defaults には、次のいずれかを設定できます。

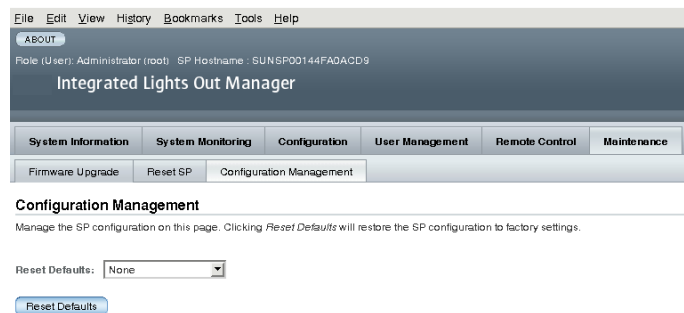
- none - 変更を行いません。
 - all - 次の SP リセット時に、ユーザーデータベースをクリアし、すべての構成プロパティをデフォルトに変更します。
2. 新しいプロパティ値が有効になるように、サービスプロセッサをリセットします。

関連情報

- 「ウェブインターフェースを使用してサービスプロセッサの設定を出荷時のデフォルトにリセットする」 (P.23)

▼ ウェブインターフェイスを使用してサービスプロセッサの設定を出荷時のデフォルトにリセットする

1. ILOM ウェブインターフェイスに管理者 (root) としてログインし、ウェブインターフェイスを表示します。
2. 「Maintenance」 --> 「Configuration Management」を選択します。



表示される「Configuration Management」ページ。

3. 「Reset Defaults」の値を選択します。
4. 「Reset Defaults」をクリックします。

関連情報

- 「CLI を使用してサービスプロセッサの設定を出荷時のデフォルトにリセットする」(P.22)

▼ CLI を使用してコンソール履歴を表示する

コンソールバッファには、最大で 1M バイトの情報を含めることができます。

ILOM はホストサーバのリセットを認識すると、Solaris OS が起動および動作中であることがサーバによって通知されるまで、コンソールバッファに起動情報および初期化データを書き込みます。

注 - このコマンドを使用するには、Administrator レベルのユーザーアクセス権が必要です。

- -> プロンプトで、次のコマンドを入力します。

```
-> set /SP/console/history property=option [...]  
-> show /SP/console/history
```

property は、次のいずれかに設定できます。

- line_count - このオプションでは、1 ~ 2048 行の範囲の値を受け入れます。行数を無制限にするには、"" を指定します。デフォルトは、すべての行です。
- pause_count - このオプションでは、1 ~ 任意の有効な整数の値か、または無限の行数を意味する "" を受け入れます。デフォルトでは、一時停止しません。
- start_from - オプションは次のとおりです。
 - end - バッファ内の最後の行、つまり最新の行 (デフォルト)。
 - beginning - バッファ内の最初の行。

set コマンドで引数を何も設定せずに show /SP/console/history コマンドを入力すると、ILOM はコンソールログの最後からすべての行を表示します。

注 - コンソールログに記録されるタイムスタンプには、サーバの時刻が反映されています。これらのタイムスタンプには現地時刻が反映されており、ILOM のコンソールログでは協定世界時 (UTC) が使用されます。Solaris OS のシステム時刻は ILOM の時刻から独立しています。

▼ CLI を使用してコンソールのエスケープ文字を変更する

/SP/console escapechars プロパティを使用すると、システムコンソールセッションから ILOM に切り替えるエスケープ文字シーケンスを変更することができます。

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /SP/console escapechars=xx
```

シーケンスは、2文字に制限されています。デフォルトの値は、#. (ハッシュとピリオド) です。シーケンスはカスタマイズできます。

xx は、任意のプリント可能な文字です。

注 - エスケープ文字の変更は、現在アクティブなコンソールセッションでは有効になりません。

関連情報

- 「ホストのリセット」 (P.4)

構成ポリシーの設定の変更

この節では、ILOM を使用する構成システムポリシーの管理について説明します。

- 「CLI を使用してユーザーデータベースのバックアップを指定する」 (P.25)
- 「CLI を使用してホストの電源投入ポリシーを指定する」 (P.26)
- 「CLI を使用して電源投入の遅延を使用不可または再度使用可能にする」 (P.27)
- 「ウェブインターフェースを使用して構成ポリシーの設定を管理する」 (P.28)

▼ CLI を使用してユーザーデータベースのバックアップを指定する

/SP/policy BACKUP_USER_DATA プロパティを使用すると、ILOM 上のローカルユーザーデータベース (ユーザー、パスワード、およびアクセス権情報など) をバックアップするかどうかを指定できます。このプロパティが enable に設定されている場合は、このデータはシステムの取り外し可能なシステム構成カード (SCC PROM) にバックアップされます。

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /SP/policy BACKUP_USER_DATA=value
```

value は、次のいずれかの値です。

- `enabled` – ユーザーデータベースを SCC にバックアップします。これはデフォルト値です。
- `disabled` – バックアップしません。
たとえば、ILOM 上のローカルユーザーデータベースをバックアップするには、次のように入力します。

```
-> set /SP/policy BACKUP_USER_DATA=enabled
```

関連情報

- 「ウェブインターフェースを使用して構成ポリシーの設定を管理する」(P.28)

▼ CLI を使用してホストの電源投入ポリシーを指定する

`/SP/policy HOST_LAST_POWER_STATE` プロパティを使用すると、予期しない電源異常のあとのサーバの動作を制御することができます。外部電源が回復すると、ILOM サービスプロセッサは自動的に動作を開始します。通常は、ILOM を使用して電源を入れないかぎり、ホストの電源は入りません。

ILOM は、サーバの現在の電源状態を非揮発性の記憶領域に記録します。`HOST_LAST_POWER_STATE` ポリシーが有効な場合、ILOM はホストを以前の電源状態に回復することができます。このポリシーは、電源障害発生時、またはサーバを別の場所に物理的に移動する場合に役立ちます。

たとえば、ホストサーバの動作中に電源が遮断された場合、`/SP/policy HOST_LAST_POWER_STATE` プロパティが `disabled` に設定されていると、ホストサーバは電源の回復後も停止したままになります。`/SP/policy HOST_LAST_POWER_STATE` プロパティが `enabled` に設定されていると、電源の回復時にホストサーバは再起動します。

1. `->` プロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /SP/policy HOST_LAST_POWER_STATE=enabled
```

このプロパティの値は、次のいずれかです。

- `enabled` – 電源の回復時に、サーバは電源切断前の状態に戻ります。

- disabled – 電源が供給されても、サーバは停止したままです (デフォルト)。
HOST_LAST_POWER_STATE を有効にする場合は、/SP/policy
HOST_POWER_ON_DELAY も構成するようにしてください。
詳細は、「[CLI を使用して電源投入の遅延を使用不可または再度使用可能にする](#)
(P.27) を参照してください。

/SP/policy HOST_AUTO_POWER_ON を使用すると、サービスプロセッサが起動されたときに、ホストの電源が自動的に入ります。このポリシーが enabled に設定されていると、サービスプロセッサは HOST_LAST_POWER_STATE を disabled に設定します。

2. -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /SP/policy HOST_AUTO_POWER_ON=enabled
```

このプロパティの値は、次のいずれかです。

- enabled – 電源が供給されると、SP の起動時にホストの電源が自動的に入ります。
- disabled – 電源が供給されても、ホストは停止したままです (デフォルト)。

関連情報

- 「[ウェブインターフェースを使用して構成ポリシーの設定を管理する](#)」 (P.28)

▼ CLI を使用して電源投入の遅延を使用不可または再度使用可能にする

/SP/policy HOST_POWER_ON_DELAY プロパティを使用すると、電源が自動的に入る前にサーバを短時間待機させることができます。遅延は、1 ~ 5 秒のランダムな間隔です。サーバの電源投入を遅延させると、主電源に対する電流サージを最小限に抑えることができます。この電源投入の遅延は、電源異常後にラック内の複数のサーバの電源を入れる場合に重要です。

このプロパティは、/SP/policy HOST_LAST_POWER_STATE が enabled に設定されている場合にのみ有効です。

- -> プロンプトで、次のように入力します。

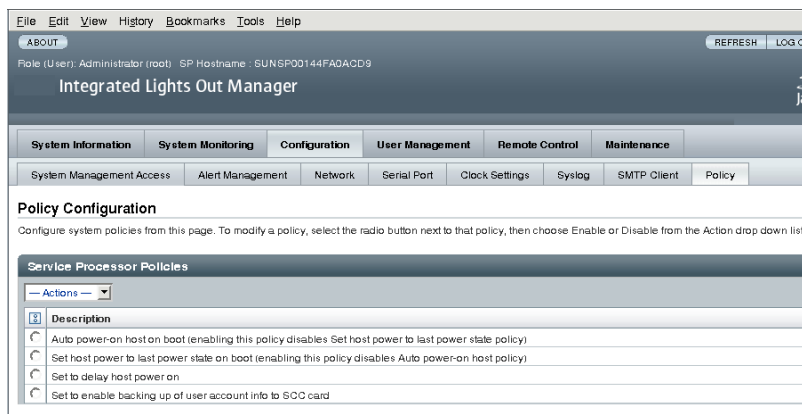
```
-> set /SP/policy HOST_POWER_ON_DELAY=value
```

value には、次の値を設定できます。

- enabled
- disabled (デフォルト)

▼ ウェブインターフェースを使用して構成ポリシーの設定を管理する

1. ILOM ウェブインターフェースに管理者 (root) としてログインし、ウェブインターフェースを表示します。
2. 「Configuration」 --> 「Policy」 を選択します。



表示される「Policy Configuration」ページ。

3. 変更するポリシーの「Policy」ラジオボタンをクリックします。
4. 「Actions」の値を選択して、選択した処理（「Enabled」または「Disabled」）を適用します。

関連情報

- 「ウェブインターフェースを使用して構成ポリシーの設定を管理する」 (P.28)

電源管理メトリックスの表示

この節では、ILOM を使用してサーバの電源メトリックスを表示する方法について説明します。

- 「電源管理の用語」 (P.29)
- 「CLI を使用して電源管理プロパティを表示する」 (P.30)
- 「システムの総消費電力を表示する」 (P.31)
- 「ウェブインターフェースを使用して電源管理プロパティを表示する」 (P.32)

電源管理の用語

表： 電源管理の用語

用語	
実電力	ワット (W) 単位で測定される入力電力。これは、システム内のすべての電源装置で消費される実電力です。
許容電力	常にサーバが使用を許可する最大電力。
使用可能電力	入力電力容量 (W 単位)。 使用可能電力は、電源装置が供給できる電力すべての合計と定義されます。
電源ポリシー	システムの電力使用を任意の時点で管理する設定。「Performance」、「Elastic」、「Regulated」、および「Siesta」の 4 つの電源ポリシーがサポートされています。各ポリシー設定の特性は、次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">• Performance: システムは使用可能電力をすべて使用できます。• Elastic: システムの電力使用を現在の利用レベルに適合させます。たとえば、作業負荷が変動した場合でも、相対利用率が常に 70% で保持されるように、システムコンポーネントに供給する電力を増減します。• Regulated: なし• Siesta: なし

関連マニュアル

- 「電源管理の用語」 (P.29)
- 「システムの総消費電力を表示する」 (P.31)
- 「CLI を使用して電源管理プロパティを表示する」 (P.30)
- 「ウェブインターフェースを使用して電源管理プロパティを表示する」 (P.32)

▼ CLI を使用して電源管理プロパティを表示する

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> show /SP/powermgmt
```

次に例を示します。

```
-> show /SP/powermgmt

/SP/powermgmt
  Targets:

  Properties:
    actual_power = 534
    permitted_power = 2626
    available_power = 2626
    control = local
    policy = performance
    regulated_budget = (none)
    elastic_budget = (none)

  Commands:
    cd
    set
    show
```

各表記の意味は次のとおりです。

- `actual_power` は、システムのすべての電源装置で消費される入力電力をワット (W) 単位で表示します。
- `available_power` は、システムコンポーネントが使用できる入力電力量をワット (W) 単位で表示します。
- `permitted_power` は、予想される最大消費電力をワット (W) 単位で表示します。
- `control` オプションは、現在このプラットフォームではサポートされていません。
- `policy` オプションは、現在このプラットフォームではサポートされていません。
- `regulated_budget` オプションは、現在このプラットフォームではサポートされていません。
- `elastic_budget` オプションは、現在このプラットフォームではサポートされていません。

関連情報

- 「電源管理の用語」 (P.29)
- 「システムの総消費電力を表示する」 (P.31)
- 「ウェブインターフェースを使用して電源管理プロパティを表示する」 (P.32)

▼ システムの総消費電力を表示する

/SYS/VPS の値は、次の値と同じです。

```
/SP/powermgmt actual_power
```

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> show /SYS/VPS
```

次に例を示します。

```
-> show /SYS/VPS

/SYS/VPS
Targets:

Properties:
  type = Power Unit
  class = Threshold Sensor
  value = 528.031 Watts
  upper_nonrecov_threshold = N/A
  upper_critical_threshold = N/A
  upper_noncritical_threshold = N/A
  lower_noncritical_threshold = N/A
  lower_critical_threshold = N/A
  lower_nonrecov_threshold = N/A

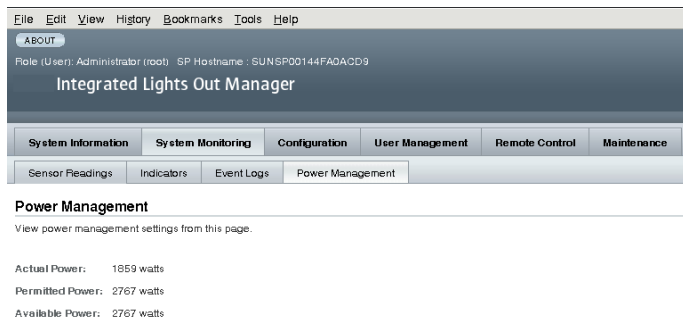
Commands:
  cd
  show
```

関連情報

- 「電源管理の用語」 (P.29)
- 「CLI を使用して電源管理プロパティを表示する」 (P.30)
- 「ウェブインターフェースを使用して電源管理プロパティを表示する」 (P.32)

▼ ウェブインターフェースを使用して電源管理プロパティを表示する

1. ILOM ウェブインターフェースに管理者 (root) としてログインし、ウェブインターフェースを表示します。
2. 「System Monitoring」->「Power Management」を選択します。



表示される「Power Management」ページ。

3. 実際の消費電力（「Actual Power」）を確認します。
4. 許容される消費電力（「Permitted Power」）を確認します。
5. 使用できる電力（「Available Power」）を確認します。

関連情報

- 「電源管理の用語」 (P.29)
- 「システムの総消費電力を表示する」 (P.31)
- 「CLI を使用して電源管理プロパティを表示する」 (P.30)

ネットワークアクセスの管理

この節では、ILOM を使用して SP へのネットワークアクセスを管理する方法について説明します。

- 「CLI を使用して SP へのネットワークアクセスを使用不可または再度使用可能にする」 (P.33)
- 「DHCP サーバの IP アドレスを表示する」 (P.33)

▼ CLI を使用してSP へのネットワークアクセスを使用不可または再度使用可能にする

/SP/network state プロパティを使用すると、サービスプロセッサのネットワークインターフェースを使用可能または使用不可にすることができます。

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /SP/network state=value
```

value には、次の値を設定できます。

- enabled (デフォルト)
- disabled

関連情報

- 「DHCP サーバの IP アドレスを表示する」(P.33)

▼ DHCP サーバの IP アドレスを表示する

サービスプロセッサによって要求された動的 IP アドレスを提供した DHCP サーバの IP アドレスを表示するには、dhcp_server_ip プロパティを参照します。

- dhcp_server_ip プロパティを確認するには、show /SP/network と入力します。
次に例を示します。

```
-> show /SP/network

/SP/network /SP/network
  Targets:

  Properties:
    commitpending = (Cannot show property)
    dhcp_server_ip = 10.8.31.5
    ipaddress = 10.8.31.188
    ipdiscovery = dhcp
    ipgateway = 10.8.31.248
    ipnetmask = 255.255.252.0
    macaddress = 00:14:4F:7E:83:4F
    pendingipaddress = 10.8.31.188
    pendingipdiscovery = dhcp
    pendingipgateway = 10.8.31.248
    pendingipnetmask = 255.255.252.0
```

```
state = enabled

Commands:
  cd
  set
  show
```

関連情報

- 「CLI を使用して SP へのネットワークアクセスを使用不可または再度使用可能にする」 (P.33)

SSH サーバの設定の管理

- 「CLI を使用して SSH 鍵のタイプを変更する」 (P.34)
- 「CLI を使用して新しい SSH 鍵セットを生成する」 (P.35)
- 「CLI を使用して SSH サーバを再起動する」 (P.35)
- 「CLI を使用して SSH サービスを使用可能または使用不可にする」 (P.35)
- 「ウェブインターフェースを使用して SSH サーバの設定を管理する」 (P.36)

▼ CLI を使用して SSH 鍵のタイプを変更する

set /SP/services/ssh generate_new_key_type コマンドを使用すると、使用しているサーバで生成された Secure Shell (SSH) ホスト鍵のタイプを変更できます。タイプの変更後、set /SP/services/ssh generate_new_key_action コマンドを使用して、新しいタイプの新しい鍵セットを生成する必要があります。

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /SP/services/ssh generate_new_key_type=value
```

value には、*rsa* または *dsa* を指定できます。

関連情報

- 「CLI を使用して新しい SSH 鍵セットを生成する」 (P.35)
- 「ウェブインターフェースを使用して SSH サーバの設定を管理する」 (P.36)

▼ CLI を使用して新しい SSH 鍵セットを生成する

set /SP/services/ssh generate_new_key_action コマンドを使用すると、新しい Secure Shell (SSH) ホスト鍵のセットを生成できます。

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /SP/services/ssh generate_new_key_action=true
```

関連情報

- 「CLI を使用して SSH 鍵のタイプを変更する」 (P.34)
- 「ウェブインターフェースを使用して SSH サーバの設定を管理する」 (P.36)

▼ CLI を使用して SSH サーバを再起動する

set /SP/services/ssh generate_new_key_action コマンドを使用して新しいホスト鍵を生成したあとで、set /SP/services/ssh restart_sshd_action コマンドを使用して SSH サーバを再起動できます。この操作によって、メモリー内にあるサーバの専用データ構造に鍵がふたたび読み込まれます。

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /SP/services/ssh restart_sshd_action=true
```

関連情報

- 「CLI を使用して SSH サービスを使用可能または使用不可にする」 (P.35)
- 「ウェブインターフェースを使用して SSH サーバの設定を管理する」 (P.36)

▼ CLI を使用して SSH サービスを使用可能または使用不可にする

set コマンドで /SP/services/ssh state プロパティを使用すると、SSH サービスを使用可能または使用不可にすることができます。SSH サービスが使用不可になっている場合は、シリアル管理 (SER MGT) ポートまたは ILOM ウェブインターフェースを介してふたたび使用可能にすることができます。

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /SP/services/ssh state=value
```

value は、次のいずれかの値です。

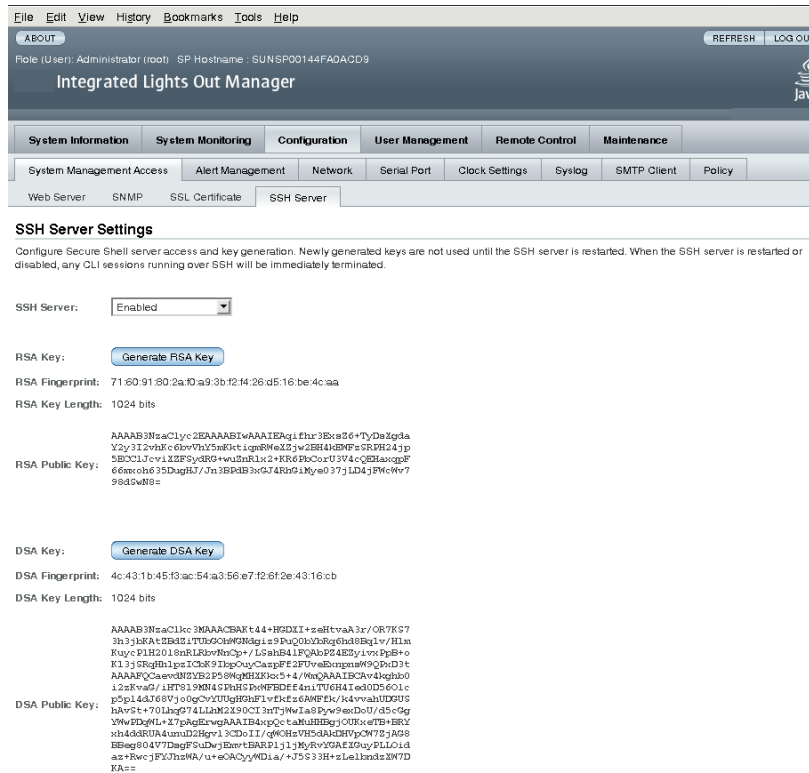
- enabled (デフォルト)
- disabled

関連情報

- 「CLI を使用して SSH サーバを再起動する」 (P.35)
- 「ウェブインターフェースを使用して SSH サーバの設定を管理する」 (P.36)

▼ ウェブインターフェースを使用して SSH サーバの設定を管理する

1. ILOM ウェブインターフェースに管理者 (root) としてログインし、ウェブインターフェースを表示します。
2. 「Configuration」 --> 「SSH Server Settings」を選択します。



表示される「SSH Server Settings」ページ。

3. 「SSH Server」プルダウンメニューから次の処理を選択します。

- SSH サーバを使用可能にする
- SSH サーバを使用不可にする
- SSH サーバを再起動する

4. 「Generate RSA Key」または「Generate DSA Key」をクリックして、新しい鍵のタイプと新しい鍵を生成します。

新しい鍵を生成した場合は、新しい鍵を有効にするために SSH サーバを再起動する必要があります。

注 - SSH サーバを再起動または使用不可にすると、SSH 上で実行している CLI セッションは即時に終了します。

関連情報

- 「CLI を使用して新しい SSH 鍵セットを生成する」 (P.35)
- 「CLI を使用して SSH 鍵のタイプを変更する」 (P.34)

- 「CLI を使用して SSH サーバを再起動する」 (P.35)
- 「CLI を使用して SSH サービスを使用可能または使用不可にする」 (P.35)

仮想キースイッチの設定の管理

この章では、デバイスの管理に役立つ、SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバの仮想キースイッチの使用方法について説明します。

- 「CLI を使用して仮想キースイッチを制御する」 (P.39)
- 「ウェブインターフェースを使用して仮想キースイッチを制御する」 (P.40)
- 「CLI を使用してコンポーネントの状態を表示する」 (P.41)

▼ CLI を使用して仮想キースイッチを制御する

`/SYS setkeyswitch_state` プロパティを使用すると、仮想キースイッチの位置を制御できます。

- -> プロンプトで、次のように入力します。

```
-> set /SYS keyswitch_state=value
```

value は、次のいずれかの値です。

- `normal` – システムは、システム自体の電源を入れて、起動処理を開始できます (デフォルト)。
- `standby` – HOST の電源を切断します。システムは、システム自体の電源を入れることができません。
- `diag` – システムは、診断プロパティの事前設定値 (`/HOST/diag level=max`, `/HOST/diag mode=max`, `/HOST/diag verbosity=max`) を使用してシステム自体の電源を入れ、全体の障害カバレッジを表示することができます。このオプションは、設定した診断プロパティの値よりも優先されます。
- `locked` – システムは、システム自体の電源を入れることができますが、フラッシュデバイスの更新、または `/HOST send_break_action` の設定は許可されません。

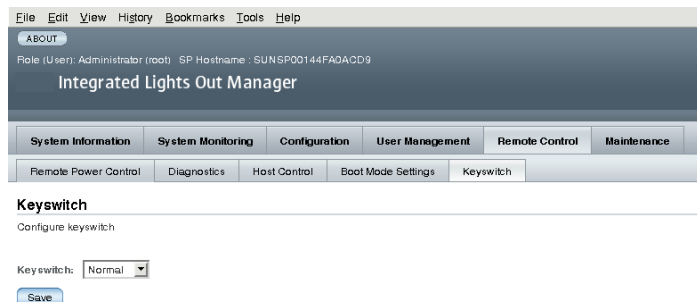
関連情報

- 「ウェブインターフェースを使用して仮想キースイッチを制御する」 (P.40)

▼ ウェブインターフェースを使用して仮想キースイッチを制御する

ウェブインターフェースを使用して、システムの仮想キースイッチの位置を制御できます。

1. ILOM ウェブインターフェースに管理者 (root) としてログインし、ウェブインターフェースを表示します。
2. 「Remote Control」 --> 「Keyswitch」 を選択します。



表示される 「Keyswitch」 ページ。

3. 「Keyswitch」 の状態の値を選択します。
4. 「Save」 をクリックします。

関連情報

- 「CLI を使用して仮想キースイッチを制御する」 (P.39)

▼ CLI を使用してコンポーネントの状態を表示する

- **show components** コマンドを入力します。

show components コマンドは、次の CLI コマンド文字列のショートカットです。

```
-> show -o table -level all /SYS component_state
```

エイリアスでも、このコマンドと同じ出力が生成されます。したがって、ユーザーはこのエイリアスを使用して、ターゲットごとに1つのプロパティに限定して表出力を行うことができます。たとえば、エイリアスによって次のような出力が生成されます。

```
-> show components
```

Target	Property	Value
/SYS/MB/RISER0/ XAUI0	component_state	Enabled
/SYS/MB/RISER0/ PCIE0	component_state	Enabled
/SYS/MB/RISER0/ PCIE3	component_state	Enabled
/SYS/MB/RISER1/ PCIE1	component_state	Enabled
/SYS/MB/RISER1/ PCIE4	component_state	Enabled
/SYS/MB/RISER2/ PCIE2	component_state	Enabled
/SYS/MB/RISER2/ PCIE5	component_state	Enabled
/SYS/MB/GBE0	component_state	Enabled
/SYS/MB/GBE1	component_state	Enabled
/SYS/MB/PCIE	component_state	Enabled
/SYS/MB/PCIE-IO/ USB	component_state	Enabled
/SYS/MB/SASHBA	component_state	Enabled
...		

IPMI センサーのリファレンス

このサーバには、多くの IPMI 準拠のセンサーおよびインジケータが装備されています。センサーは、電圧、温度範囲、およびコンポーネントの取り付けと取り外しが検出されたことを測定します。発光ダイオード (LED) などのインジケータは、保守が必要なときなど、サーバの重要な状態を通知します。

この付録は、次の節で構成されています。

- 「SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバのセンサー」 (P.44)
- 「SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバのインジケータ」 (P.48)

SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバのセンサー

表： SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバのセンサー

名前	バス	説明
/MB/V_+3V3_STBY	/SYS/MB/V_+3V3_STBY	3.3V のスタンバイ電圧しきい値センサー
/MB/V_+3V3_MAIN	/SYS/MB/V_+3V3_MAIN	3.3V の主電圧しきい値センサー
/MB/V_+12V0_MAIN	/SYS/MB/V_+12V0_MAIN	12V の主電圧しきい値センサー
/MB/V_5V0_VCC	/SYS/MB/V_5V0_VC	5V の主電圧しきい値センサー
/MB/V_1V0_VDD	/SYS/MB/V_1V0_VDD	1V の主電圧しきい値センサー
/MB/V_1V2_VDD	/SYS/MB/V_1V2_VDD	1.2V の主電圧しきい値センサー
/MB/V_1V5_VDD	/SYS/MB/V_1V5_VDD	1.5V の主電圧しきい値センサー
/MB/V_1V5_IO	/SYS/MB/V_1V5_IO	1.5V の入出力電圧しきい値センサー
/MB/V_VTTL	/SYS/MB/MRn/V_VTTL	左メモリーライザー (0 ~ 1) の VTT 電圧
/MB/V_VTTR	/SYS/MB/MRn/V_VTTR	右メモリーライザー (0 ~ 1) の VTT 電圧
/MB/I_VCOREL	/SYS/MB/I_VCOREL	CPU 0 コア電流しきい値センサー
/MB/I_VCORER	/SYS/MB/I_VCORER	CPU 1 コア電流しきい値センサー
/MB/T_BUS_BAR <i>n</i>	/SYS/MB/T_BUS_BAR <i>n</i>	マザーボードバスバー (0 ~ 1) の温度
/MB/V_VBAT	/SYS/MB/V_VBAT	バッテリー電圧しきい値センサー
/MB/V_VDDIO	/SYS/MB/V_VDDIO	電圧しきい値センサー
/MB/T_AMB	/SYS/MB/T_AMB	周囲温度しきい値センサー
/MB/I_USBn	/SYS/MB/I_USBn	USB ポート (0 ~ 1) の電流センサー
/PSn/AC_POK	/SYS/PSn/AC_POK	電源装置 (0 ~ 1) の AC 電源センサー
/MB/V_VCOREL	/SYS/MB/V_VCOREL	CPU 0 コア電圧しきい値センサー
/MB/V_VCORER	/SYS/MB/V_VCORER	CPU 1 コア電圧しきい値センサー

表： SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバのセンサー (続き)

名前	パス	説明
/MB/V_VMEML	/SYS/MB/V_VMEML	左メモリー分岐電圧しきい値センサー
/MB/V_VMEMR	/SYS/MB/V_VMEMR	右メモリー分岐電圧しきい値センサー
/MB/V_VCOREL_POK	/SYS/MB/V_VCOREL_POK	CPU 0 仕様範囲内コア電源センサー
/MB/V_VCORER_POK	/SYS/MB/V_VCORER_POK	CPU 1 仕様範囲内コア電源センサー
/MB/VMEML_POK	/SYS/MB/VMEML_POK	左メモリー分岐仕様範囲内電源センサー
/MB/VMEMR_POK	/SYS/MB/VMEMR_POK	右メモリー分岐仕様範囲内電源センサー
/Pn/BRn/CHn/Dn/P	/SYS/Pn/BRn/CHn/Dn/PRSNT	CMP (0 ~ 1) ブランチ (0 ~ 1) チャンネル (0 ~ 1) DIMM(0 ~ 1) の存在センサー
/MB/P0/MR0/P	/SYS/MB/P0/MR0/PRSNT	CMP 0 ライザー 0 の存在センサー
/MB/P1/MR1/P	/SYS/MB/P1/MR1/PRSNT	CMP 1 ライザー 1 の存在センサー
/P0/BRn/CHn/Dn/PRSNT	/SYS/P0/BRn/CHn/Dn/PRSNT	CMP 0 ライザー 0 ブランチ (0 ~ 1) チャンネル (0 ~ 1) DIMM (2 ~ 3) の存在センサー
/P1/BRn/CHn/Dn/PRSNT	/SYS/P1/BRn/CHn/Dn/PRSNT	CMP 1 ライザー 1 ブランチ (0 ~ 1) チャンネル (0 ~ 1) DIMM (2 ~ 3) の存在センサー
/PSn/VOLT_FAULT	/SYS/PSn/VOLT_FAULT	電源装置 (0 ~ 1) の電圧障害センサー
/PSn/TEMP_FAULT	/SYS/PSn/TEMP_FAULT	電源装置 (0 ~ 1) の温度障害センサー
/PSn/CUR_FAULT	/SYS/PSn/CUR_FAULT	電源装置 (0 ~ 1) の電流障害センサー
/PSn/DC_POK	/SYS/PSn/DC_POK	電源装置 (0 ~ 1) の DC 電源センサー
/PSn/FAN_FAULT	/SYS/PSn/FAN_FAULT	電源装置 (0 ~ 1) のファン障害センサー
/PSn/V_IN_MAIN	/SYS/PSn/V_IN_MAIN	電源装置 (0 ~ 1) の AC 電圧センサー
/PSn/I_IN_MAIN	/SYS/PSn/I_IN_MAIN	電源装置 (0 ~ 1) の AC 電流センサー

表： SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバのセンサー (続き)

名前	パス	説明
/PSn/I_IN_LIMIT	/SYS/PSn/I_IN_LIMIT	電源装置 (0 ~ 1) の AC 電流制限センサー
/PSn/IN_POWER	/SYS/PSn/IN_POWER	電源装置 (0 ~ 1) の AC 電源センサー
/PSn/V_OUT_MAIN	/SYS/PSn/V_OUT_MAIN	電源装置 (0 ~ 1) の DC 電圧センサー
/PSn/I_OUT_MAIN	/SYS/PSn/I_OUT_MAIN	電源装置 (0 ~ 1) の DC 電流センサー
/PSn/I_OUT_LIMIT	/SYS/PSn/I_OUT_LIMIT	電源装置 (0 ~ 1) の DC 電流制限センサー
/PSn/OUT_POWER	/SYS/PSn/OUT_POWER	電源装置 (0 ~ 1) の DC 電源センサー
/SYS/VPS	/SYS/SYS/VPS	システム総電力 (W 単位) センサー
/FBn/FMn/Fn/TACH	/SYS/FBn/FMn/Fn/TACH	ファンボード (0 ~ 1) ファンモジュール (0 ~ 3) ファン (0 ~ 1) の速度センサー
/MB/CMPn/T_TCORE	/SYS/MB/CMPn/T_TCORE	CMP (0 ~ 1) のコア上部温度センサー
/MB/CMPn/T_BCORE	/SYS/MB/CMPn/T_BCORE	CMP (0 ~ 1) のコア下部温度センサー
/PSn/PRSNT	/SYS/PSn/PRSNT	電源装置 (0 ~ 1) の存在センサー
/FBn/PRSNT	/SYS/FBn/PRSNT	ファンボード (0 ~ 1) の存在センサー
/FBn/FMn/PRSNT	/SYS/FBn/FMn/PRSNT	ファンボード (0 ~ 1) ファンモジュール (0 ~ 3) の存在センサー
/Pn/BRn/CHn/Dn/T	/SYS/Pn/BRn/CHn/Dn/T	CMP (0 ~ 1) ブランチ (0 ~ 1) チャンネル (0 ~ 1) DIMM (0 ~ 1) の温度センサー
/P0/BRn/CHn/Dn/T	/SYS/P0/BRn/CHn/Dn/T	CMP 0 ライザー 0 ブランチ (0 ~ 1) チャンネル (0 ~ 1) DIMM (2 ~ 3) の温度センサー
/P1/BRn/CHn/Dn/T	/SYS/P1/BRn/CHn/Dn/T	CMP 1 ライザー 1 ブランチ (0 ~ 1) チャンネル (0 ~ 1) DIMM (2 ~ 3) の温度センサー
/HDDn/PRSNT	/SYS/HDDn/PRSNT	ハードディスク (0 ~ 15) の存在センサー

表： SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバのセンサー (続き)

名前	パス	説明
/MB/MRn/V_VMEM	(アクセス不可能、内部で使用)	メモリーライザー (0 ~ 1) のメモリー電圧しきい値センサー
/MB/MRn/V_+1V5	(アクセス不可能、内部で使用)	メモリーライザー (0 ~ 1) のメモリー電圧しきい値センサー
/SASBP/PRSNT	(アクセス不可能、内部で使用)	ディスクバックプレーン存在センサー
/USBBD/PRSNT	(アクセス不可能、内部で使用)	USB ボードの存在センサー
/MB/RSR0/XAUI0/P	(アクセス不可能、内部で使用)	ライザーボード 0 XAUI 0 の存在センサー
/MB/RSR1/XAUI1/P	(アクセス不可能、内部で使用)	ライザーボード 1 XAUI 1 の存在センサー
/PDB/+5V0_POK	(アクセス不可能、内部で使用)	PDB 5.0V 仕様範囲内電源センサー
/XAUIIn/5V0_FAULT	(アクセス不可能、内部で使用)	XAUI (0 ~ 1) 5.0V の障害センサー
/XAUIIn/3V3_FAULT	(アクセス不可能、内部で使用)	XAUI (0 ~ 1) 3.3V の障害センサー
/XAUIIn/1V8_FAULT	(アクセス不可能、内部で使用)	XAUI (0 ~ 1) 1.8V の障害センサー
/XAUIIn/1V2_FAULT	(アクセス不可能、内部で使用)	XAUI (0 ~ 1) 1.2V の障害センサー
/MB/Pn/CBUS_BTn	(アクセス不可能、内部で使用)	CPU (0 ~ 1) CPU 取り付け (0 ~ 11) の障害センサー
/XAUIIn/0V9_FAULT	(アクセス不可能、内部で使用)	XAUI (0 ~ 1) 0.9V の障害センサー

関連マニュアル

- 「SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバのインジケータ」 (P.48)

SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバのインジケータ

表： SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバのインジケータ

名前	パス	説明
LOCATE	/SYS/LOCATE	位置特定インジケータ
ACT	/SYS/ACT	システム電源稼働インジケータ
SERVICE	/SYS/SERVICE	保守インジケータ
/Pn/BRn/CHn/Dn/S	/SYS/MB/CMPn/BRn/CHn/Dn/SERVICE	CMP (0 ~ 1) ブランチ (0 ~ 1) チャンネル (0 ~ 1) DIMM (0 ~ 1) の保守インジケータ
/P0/BRn/CHn/Dn/S	/SYS/MB/CMP0/MR0/BRn/CHn/Dn/SERVICE	CMP 0 ライザー 0 ブランチ (0 ~ 1) チャンネル (0 ~ 1) DIMM (2 ~ 3) の保守インジケータ
/P1/BRn/CHn/Dn/S	/SYS/MB/CMP1/MR1/BRn/CHn/Dn/SERVICE	CMP 1 ライザー 1 ブランチ (0 ~ 1) チャンネル (0 ~ 1) DIMM (2 ~ 3) の保守インジケータ
PS_FAULT	/SYS/PS_FAULT	電源装置障害インジケータ
TEMP_FAULT	/SYS/TEMP_FAULT	温度障害インジケータ
FAN_FAULT	/SYS/FAN_FAULT	ファン障害インジケータ

表： SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバのインジケータ (続き)

名前	パス	説明
/FBn/FMn/SERVICE	/SYS/FANBDn/FMn/SERVICE	ファンボード (0 ~ 1) ファンモジュール (0 ~ 3) の保守インジ ケータ
/SYS/HDDn/SERVICE	/SYS/HDDn/SERVICE	ハードディスク (0 ~ 15) の保守インジケ ータ
/SYS/HDDn/OK2RM	/SYS/HDDn/OK2RM	ハードディスク (0 ~ 15) の取り外し可能イ ンジケータ

関連マニュアル

- 「SPARC Enterprise T5140 および T5240 サーバのセンサー」 (P.44)

ALOM CMT 互換シェル

ILOM では、互換シェルを使用して ALOM CMT コマンド行インターフェースの一部の機能をサポートしています。ILOM と ALOM CMT には大きな違いがあります。この付録では、それらの違いについて説明します。この付録は、次の節で構成されています。

- 「ILOM ネットワーク構成プロパティの確定」 (P.51)
- 「ALOM CMT 互換シェルを作成する」 (P.52)
- 「ILOM コマンドと ALOM CMT コマンドの比較」 (P.54)
- 「ILOM コマンドと ALOM CMT コマンドの比較」 (P.54)

ILOM ネットワーク構成プロパティの確定

ネットワーク構成変数やシリアルポート構成変数など、一部の ALOM CMT 変数の値を変更した場合、システムコントローラをリセットして変更を有効にする必要がありました。これに比べて、ILOM では、対応するプロパティの値を変更した後、サービスプロセッサをリセットする必要はありません。ILOM の場合、プロパティの値を変更してから SP をリセットすると、新しいプロパティ設定が失われます。

その代わりに、ネットワーク構成プロパティを変更してから、ALOM 互換 CLI で `setsc netsc_commit` を使用するか、または ILOM CLI で `set /SP/network commitpending` を使用して、そのプロパティを「確定」します。シリアルポート構成プロパティを変更する場合は、まず目的のプロパティを設定してから、ALOM 互換 CLI で `setsc ser_commit` を使用するか、または ILOM CLI で `set /SP/serial/external commitpending` を使用して、そのプロパティを確定します。

たとえば、ALOM 互換 CLI を使用して静的 IP アドレスを設定するには、次のように入力します。

```
sc> setsc netsc_ipaddr xxx.xxx.xxx.xxx
sc> setsc netsc_commit true
```

ILOM CLI を使用して同じプロパティを設定するには、次のように入力します。

```
-> set /SP/network pendingipaddress=xxx.xxx.xxx.xxx
Set 'pendingipaddress' to 'xxx.xxx.xxx.xxx'
-> set /SP/network commitpending=true
Set 'commitpending' to 'true'
->
```

つまり、変更を有効にするには、その変更を「確定」する必要があります。

表: ALOM CMT commit 変数と対応する ILOM プロパティ

ALOM CMT 変数	対応する ILOM プロパティ
netsc_commit	/SP/network commitpending
ser_commit	/SP/serial/external commitpending

▼ ALOM CMT 互換シェルを作成する

デフォルトでは、サーバは ILOM シェルで操作するように設定されています。サーバの管理に ALOM CMT コマンドと類似するコマンドを使用することが望ましい場合は、ALOM 互換シェルを作成できます。

1. ユーザー名 root を使用してサービスプロセッサにログオンします。

電源を入れると、SP が起動して ILOM ログインプロンプトが表示されます。出荷時のデフォルトのパスワードは、changeme です。

```
XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX login: root
Password:
Waiting for daemons to initialize...
Daemons ready

Integrated Lights Out Manager

Version 2.0.0.0

Copyright 2007 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.

Warning: password is set to factory default.
```

2. admin という名前のユーザーを作成し、admin アカウントの役割を Administrator に設定してから、CLI モードを alom に設定します。

```
-> create /SP/users/admin
Creating user...
Enter new password: *****
Enter new password again: *****
Created /SP/users/admin

-> set /SP/users/admin role=Administrator
Set 'role' to 'Administrator'

->set /SP/users/admin cli_mode=alom
Set 'cli_mode' to 'alom'
```

注 - 例の中のアスタリスクは、パスワードの入力時には表示されません。

create および set コマンドは 1 つの行にまとめることができます。

```
-> create /SP/users/admin role=Administrator cli_mode=alom
Creating user...
Enter new password: *****
Enter new password again: *****
Created /SP/users/admin
```

3. admin アカウントの作成が完了したら、root アカウントをログアウトします。

```
-> exit
```

4. ILOM ログインプロンプトから ALOM CLI シェル (sc> プロンプトで示される) にログインします。

```
XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX login: admin
Password:
Waiting for daemons to initialize...

Daemons ready

Integrated Lights Out Manager

Version 2.0.0.0

Copyright 2007 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.

sc>
```

ALOM CMT 互換シェルでは、一部例外はありますが、ALOM CMT コマンドと類似するコマンドを使用できます。ALOM CMT 互換シェルは ILOM インターフェイスであることを覚えておいてください。ILOM CLI と ALOM CMT 互換 CLI の比較については、「[ILOM コマンドと ALOM CMT コマンドの比較](#)」(P.54) で説明します。

関連情報

- 「[ILOM コマンドと ALOM CMT コマンドの比較](#)」(P.54)

ILOM コマンドと ALOM CMT コマンドの比較

次の表に、ALOM CMT のコマンドセットとデフォルトの ILOM CLI コマンドセットにおける、コマンドごとの比較を示します。次の表には、サポートされている ALOM CMT コマンドオプションのみが記載されています。対応する ILOM プロパティが存在しない ALOM CMT コマンド行引数がある場合、それらの ALOM CMT 引数は省略されています。ALOM 互換シェルのコマンドセットでは、ALOM CMT でサポートされているコマンドおよび引数と非常によく似た同等のコマンドおよび引数が提供されています。

注 - ALOM CMT 情報コマンドを表示すると、デフォルトでは、その出力が簡潔形式に制限されていますが、コマンドに `-v` フラグを指定することによってより詳細な出力が提供されます。ILOM の `show` コマンドには、簡潔出力形式はありません。このようなコマンドでは、常に詳細出力が提供されます。

表： ALOM CMT シェルの構成コマンド

ALOM CMT コマンド	概要	対応する ILOM コマンド
<code>password</code>	現在のユーザーのログインパスワードを変更します。	<code>set /SP/users/username password</code>
<code>restartssh</code>	<code>ssh-keygen</code> コマンドによって生成された新しいホスト鍵が再ロードされるように、SSH サーバを再起動します。	<code>set /SP/services/ssh restart_sshd_action=true</code>
<code>setdate [[mmdd]HHMM mmddHHMM[cc]yy][.SS]</code>	ALOM CMT の日付および時刻を設定します。	<code>set /SP/clock datetime=value</code>
<code>setdefaults</code>	すべての ALOM CMT 構成パラメータをデフォルト値にリセットします。-a オプションを指定すると、ユーザー情報が出荷時のデフォルト (1 つの admin アカウトのみ) にリセットされます。	<code>set /SP reset_to_defaults=configuration</code>
<code>setdefaults</code>	すべての ALOM CMT 構成パラメータをデフォルト値にリセットします。-a オプションを指定すると、ユーザー情報が出荷時のデフォルト (1 つの admin アカウトのみ) にリセットされます。	<code>set /SP reset_to_defaults=all</code>
<code>setkeyswitch [normal stby diag locked]</code>	仮想キースイッチの状態を設定します。仮想キースイッチをスタンバイ (stby) に設定すると、サーバの電源が切断されます。ホストサーバの電源を切る前に、ALOM CMT によって電源切断の確認が求められます。	<code>set /SYS keyswitch_state=value</code>
<code>setsc [param] [value]</code>	指定した ALOM CMT パラメータに割り当てる値を設定します。	<code>set target property=value</code>
<code>setupsc</code>	対話型の構成スクリプトを実行します。このスクリプトでは、ALOM CMT 構成変数が設定されます。	ILOM での対応なし
<code>showplatform [-v]</code>	ホストシステムのハードウェア構成に関する情報と、そのハードウェアがサービスを提供しているかどうかを表示します。-v オプションを指定すると、表示されているコンポーネントに関する詳細情報が表示されます。	<code>show /HOST</code>
<code>showfru</code>	ホストサーバ内の現場交換可能ユニット (FRU) に関する情報を表示します。	ILOM での対応なし

表: ALOM CMT シェルの構成コマンド (続き)

ALOM CMT コマンド	概要	対応する ILOM コマンド
showusers	ALOM CMT に現在ログインしているユーザーのリストを表示します。このコマンドの表示書式は、UNIX コマンド <code>who</code> の表示書式と類似しています。 -g オプションを指定すると、 <i>lines</i> で指定した行数を表示するたびに表示を一時停止します。	show /SP/sessions
showusers -g <i>lines</i>		ILOM での対応なし
showhost	ホスト側のコンポーネントのバージョン情報を表示します。	show /HOST
showhost <i>version</i>	<i>version</i> オプションを指定すると、オプションを指定しない場合の <code>showhost</code> コマンドと同じ情報が表示されます。	
showkeyswitch	仮想キースwitchの状態を表示します。	show /SYS keyswitch_state
showsc [<i>param</i>]	現在の非揮発性ランダムアクセスメモリー (NVRAM) の構成パラメータを表示します。	show <i>target property</i>
showdate	ALOM CMT の日付を表示します。ALOM CMT の時刻は、現地時刻ではなく協定世界時 (UTC) で表現されず。Solaris OS と ALOM CMT の時刻は同期化されません。	show /SP/clock datetime
ssh-keygen -l	Secure Shell (SSH) ホスト鍵を生成し、ホスト鍵フィンガープリントを SC に表示します。	show /SP/services/ssh/keys rsa dsa
ssh-keygen -r		set /SP/services/ssh generate_new_key_action= true
ssh-keygen -t {rsa dsa}		set /SP/services/ssh generate_new_key_type= [rsa dsa]
usershow [<i>username</i>]	すべてのユーザーのアカウント、アクセス権レベル、およびパスワード割り当ての有無を示すリストを表示します。	show /SP/users
useradd <i>username</i>	ALOM CMT にユーザーアカウントを追加します。	create /SP/users/ <i>username</i>

表： ALOM CMT シェルの構成コマンド (続き)

ALOM CMT コマンド	概要	対応する ILOM コマンド
<code>userdel username</code>	ALOM CMT からユーザーアカウントを削除します。-y オプションを使用すると、確認の質問をスキップできません。	<code>delete /SP/users/username</code>
<code>userdel -y username</code>		<code>delete -script /SP/users/username</code>
<code>userpassword [username]</code>	ユーザーのパスワードを設定または変更します。	<code>set /SP/users/username password</code>
<code>userperm [username] [c] [u] [a] [r]</code>	ユーザーアカウントのアクセス権レベルを設定します。	<code>set /SP/users/username role=permissions</code> (ここで、 <i>permissions</i> は Administrator または Operator)

表： ALOM CMT シェルのログコマンド

ALOM CMT コマンド	概要	対応する ILOM コマンド
<code>showlogs</code> <code>[-b lines -e lines -v]</code> <code>[-g lines] [-p logtype [r p]]</code>	ALOM CMT RAM イベントログに記録されたすべてのイベントの履歴、または持続ログに記録されたメジャーイベントおよびクリティカルイベントを表示します。-p オプションを指定すると、RAM イベントログのエントリのみを表示するか (<i>logtype r</i>)、持続イベントログのエントリのみを表示するか (<i>logtype p</i>) を選択できます。	<code>show /SP/logs/event/list</code> ILOM での対応なし
<code>consolehistory</code> <code>[-b lines -e lines -v]</code> <code>[-g lines] [boot run]</code>	ホストサーバコンソールの出力バッファを表示します。	<code>show /SP/console/history</code>

表: ALOM CMT シェルの状態コマンドおよび制御コマンド

ALOM CMT コマンド	概要	対応する ILOM コマンド
showenvironment	ホストサーバの環境状態を表示します。この情報には、システムの温度、電源装置の状態、フロントパネルの LED の状態、ハードディスクドライブの状態、ファンの状態、電圧と電流のセンサーの状態があります。	show -o table -level all /SYS
showpower [-v]	ホストサーバの電源メトリックスを表示します。	show /SP/powermgmt
shownetwork [-v]	現在のネットワーク構成情報を表示します。-v オプションを指定すると、DHCP サーバの情報などのネットワークに関する追加情報が表示されます。	show /SP/network
console	ホストシステムのコンソールに接続します。	start /SP/console
console -f	-f オプションを指定すると、コンソールの書き込みロックが強制的に別のユーザーに移動します。	ILOM での対応なし
break -c	ホストサーバ上で動作している Solaris OS ソフトウェアを中断し、Solaris ソフトウェアが起動されたモードに応じて、OpenBoot PROM または kmdb に制御を移します。	set /HOST send_break_action=break
break -D		set /HOST send_break_action=dumpcore
bootmode [normal] [reset_nvram] [config=configname] [bootscript = string]	ホストサーバの OpenBoot PROM ファームウェアの起動方法を制御します。	set /HOST/bootmode property=value [ここで、property は state、config、または script]
flashupdate -s IPaddr -f pathname [-v]	ホストファームウェアおよび ALOM CMT ファームウェアの両方のシステムファームウェアをダウンロードおよび更新します。ILOM では、ipaddr は TFTP サーバである必要があります。DHCP が使用されている場合、ipaddr は TFTP ホストの名前に置き換えることができます。	load -source tftp://ipaddr/pathname

表: ALOM CMT シェルの状態コマンドおよび制御コマンド (続き)

ALOM CMT コマンド	概要	対応する ILOM コマンド
reset [-c]	システムの正常なリセットを試みます。失敗した場合は、システムを強制的にリセットします。	reset /SYS
reset [-y] [-c]		reset -script /SYS
reset -f	システムを強制的にリセットします。	reset -f /SYS
reset -d	制御ドメインの正常なリセットを試みます。失敗した場合は、制御ドメインを強制的にリセットします。	reset /HOST/domain/control
reset [-d] [-f]	制御ドメインを強制的にリセットします。	reset - f /HOST/domain/control
reset [-d] [-n]	制御ドメインをリセットしたとき、このオプションでは自動的に起動が行われることがあります (auto-boot オプションが指定されていない場合のデフォルトの動作)。	set /HOST/domain/control auto-boot=disable reset /HOST/domain/control
reset [-d] [-f] [-n]	制御ドメインをリセットしたとき、自動的な起動は行われず、OpenBoot の ok プロンプトの状態のままになります。このオプションは、すべてのリブート変数を上書きして、ホストのリセット後に制御ドメインを OpenBoot の ok プロンプトで停止させます。auto-boot? オプションは変更されないため、auto-boot? オプションが true に設定されていると、それ以降の reset コマンドではホストが自動的にリブートされます。	set /HOST/domain/control auto-boot=disable reset -f /HOST/domain/control
powercycle [-y] [-f]	poweroff のあとに poweron を実行します。-f オプションを指定すると、poweroff が強制的に即時に実行されます。-f オプションを指定しない場合は、正常な停止が試行されます。	stop /SYS start /SYS
powercycle -y		stop -script /SYS start -script /SYS
powercycle -f		stop -force /SYS start -force /SYS

表: ALOM CMT シェルの状態コマンドおよび制御コマンド (続き)

ALOM CMT コマンド	概要	対応する ILOM コマンド
poweroff	ホストサーバの主電源を切ります。-y オプションを使用すると、確認の質問をスキップできます。ALOM CMT は、正常なサーバの停止を試行します。-f オプションを指定すると、即時停止が強制的に行われます。	stop /SYS
poweroff -y		stop -script /SYS
poweroff -f		stop -force /SYS
poweron	ホストサーバまたは FRU の主電源を入れます。	start /SYS
setlocator [on/off]	サーバのロケータ LED をオンまたはオフに切り替えます。	set /SYS/LOCATE value=value
showfaults [-v]	現在検出されているシステム障害を表示します。	show /SP/faultmgmt
clearfault UUID	手動でシステム障害を修復します。	set /SYS/component clear_fault_action=true
showlocator	ロケータ LED の現在の状態がオンまたはオフのいずれであるかを表示します。	show /SYS/LOCATE

表: ALOM CMT シェルの FRU コマンド

ALOM CMT コマンド	概要	対応する ILOM コマンド
setfru -c data	-c オプションを使用すると、システムのおすべての FRU にインベントリコードなどの情報を格納できます。	set /SYS customer_frudata= data
showfru -g lines [-s -d] [FRU]	ホストサーバ内の FRU に関する情報を表示します。	ILOM での対応なし
removefru [-y] [FRU]	電源装置などの FRU を取り外す準備をします。-y オプションを使用すると、確認の質問をスキップできます。	set /SYS/PS0 prepare_to_remove_action= true

表： ALOM CMT シェルの自動システム回復 (ASR) コマンド

ALOM CMT コマンド	概要	対応する ILOM コマンド
<code>enablecomponent</code> <code>asr-key</code>	asr-db ブラックリストからコンポーネントを削除します。	<code>set /SYS/component</code> <code>component_state=enabled</code>
<code>disablecomponent</code> <code>asr-key</code>	asr-db ブラックリストにコンポーネントを追加します。	<code>set /SYS/component</code> <code>component_state=disabled</code>
<code>showcomponent</code> <i>asr-key</i>	システムコンポーネントとそのテスト状態 (ASR 状態) を表示します。	<code>show /SYS/component</code> <code>component_state</code>
<code>clearasrdb</code>	asr-db ブラックリストからすべてのエントリを削除します。	ILOM での対応なし

表： ALOM CMT シェルのその他のコマンド

ALOM CMT コマンド	概要	対応する ILOM コマンド
<code>help</code> [<i>command</i>]	すべての ALOM CMT コマンドのリスト、およびその構文と機能の概要を表示します。オプションとしてコマンド名を指定すると、そのコマンドのヘルプを表示できます。	<code>help</code>
<code>reset</code>	ALOM CMT をリブートします。-y オプションを使用すると、確認の質問をスキップできます。	<code>reset /SP</code>
<code>reset</code> -y		<code>reset -script /SP</code>
<code>userclimode</code>	シェルのタイプを <i>shelltype</i> に設定します。ここで、 <i>shelltype</i> は <code>default</code> または <code>alom</code> です。	<code>set /SP/users/username cli_mode=shelltype</code>
<code>logout</code>	ALOM CMT シェルセッションからログアウトします。	<code>exit</code>
<code>set</code> <code>sys_ioconfigure</code> <i>value</i>	<code>ioreconfiguration</code> パラメータを <i>value</i> に設定します。ここで、 <i>value</i> は <code>true</code> 、 <code>false</code> 、または <code>next-boot</code> です。	<code>set /HOST ioreconfigure=value</code>

関連マニュアル

- 「ALOM CMT [互換シェルを作成する](#)」 (P.52)

索引

記号

/HOST autorestart プロパティ, 2-11
/HOST autorunonerror プロパティ, 2-12
/HOST macaddress プロパティ, 2-10
/HOST send_break_action プロパティ, 2-18
/HOST status プロパティ, 2-18
/HOST/bootmode config プロパティ, 2-6
/HOST/bootmode expires プロパティ, 2-8
/HOST/bootmode script プロパティ, 2-7
/HOST/bootmode state プロパティ, 2-6
/HOST/diag level プロパティ, 2-15
/HOST/diag mode プロパティ, 2-14
/HOST/diag trigger プロパティ, 2-14
/HOST/diag verbosity プロパティ, 2-15
/SP customer_fru_data プロパティ, 3-20
/SP reset_to_defaults プロパティ, 3-22
/SP system_identifier プロパティ, 3-21
/SP/console escapechars プロパティ, 3-24
/SP/policy BACKUP_USER_DATA プロパティ, 3-25
/SP/policy HOST_AUTO_POWER_ON プロパティ, 3-27
/SP/policy HOST_LAST_POWER_STATE プロパティ, 3-26
/SP/policy HOST_POWER_ON_DELAY プロパティ, 3-27

/SP/policy HOST_POWER_ON_DELAY プロパティ, 3-27
/SP/powermgmt プロパティ, 3-30
/SP/services/ssh generate_new_key_action プロパティ, 3-35
/SP/services/ssh generate_new_key_type プロパティ, 3-34
/SP/services/ssh restart_sshd_action プロパティ, 3-35
/SP/services/ssh state プロパティ, 3-35
/SYS keyswitch_state プロパティ, 4-39
/SYS/VPS プロパティ, 3-31

A

ALOM CMT 互換シェル
作成, 6-52

ALOM CMT コマンド、ILOM コマンドとの比較,
6-54

I

ILOM プロパティ
/HOST autorestart, 2-11
/HOST autorunonerror, 2-12
/HOST macaddress, 2-10
/HOST send_break_action, 2-18
/HOST status, 2-18
/HOST/bootmode config, 2-6
/HOST/bootmode expires, 2-8
/HOST/bootmode script, 2-7

- /HOST/bootmode state, 2-6
- /HOST/diag level, 2-15
- /HOST/diag mode, 2-14
- /HOST/diag trigger, 2-14
- /HOST/diag verbosity, 2-15
- /SP customer_fruedata, 3-20
- /SP reset_to_defaults, 3-22
- /SP system_identifier, 3-21
- /SP/console escapechars, 3-24
- /SP/policy BACKUP_USER_DATA, 3-25
- /SP/policy HOST_AUTO_POWER_ON, 3-27
- /SP/policy HOST_LAST_POWER_STATE, 3-26, 3-27
- /SP/policy HOST_POWER_ON_DELAY, 3-27
- /SP/powermgmt, 3-30
- /SP/services/ssh
 - generate_new_key_action, 3-35
- /SP/services/ssh
 - generate_new_key_type, 3-34
- /SP/services/ssh
 - restart_sshd_action, 3-35
- /SP/services/ssh state, 3-35
- /SYS keyswitch_state, 4-39
- /SYS/VPS, 3-31

IPMI インジケータ, 5-48

IPMI センサー, 5-44

O

OpenBoot のバージョン、表示

- CLI を使用, 2-10

- ウェブインターフェースを使用, 2-12

P

POST のバージョン、表示

- ウェブインターフェースを使用, 2-12

- CLI を使用, 2-11

う

ウォッチドッグタイマー, 2-11

き

起動モード

- 概要, 2-5

- 構成の管理, 2-6

- スクリプトの管理, 2-7

- リセットの管理, 2-6

さ

サーバ

- プラットフォーム情報, 2-18

し

出荷時のデフォルト, 3-22

診断

- CLI での管理

- 冗長性の選択, 2-15

- トリガーの条件の指定, 2-14

- モードの変更, 2-14

- レベルの指定, 2-15

- ウェブインターフェースでの管理, 2-16

た

タイマー、ウォッチドッグ, 2-11

て

デフォルト、リセット, 3-22

ふ

プラットフォーム、表示, 2-18

プロパティ

- システムユーザー, 2-17

- バックアップデータ, 3-25

ほ

ホストの状態情報、表示

- CLI を使用, 2-18

ゆ

ユーザーデータのバックアップ, 3-25

り

リモートコントロールの設定

- CLI での変更, 2-4

- ウェブインターフェースでの変更, 2-8

FUJITSU